

梵天原遺跡

——平成 7 年度県営圃場整備事業楓木地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1996. 3

茅野市教育委員会

BONTENBARA SITE

梵天原遺跡

——平成 7 年度県営圃場整備事業楓木地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1996. 3

茅野市教育委員会



(1) 道幹上空遠景(遠くに漁港跡を望む)



(2) 遊説の立地するハリケ山脈

序 文

梵天原遺跡は平成7年度県営圃場整備事業榎木地区の施工に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものです。

梵天原遺跡は採集された遺物も少量で、規模等に不明確な部分がありました。今回の発掘調査によりその全貌が明らかになり、遺跡の性格が明確になりました。

発掘調査の結果、縄文時代の狩猟用に用いられた落し穴が51基と土坑が27基確認されました。落し穴を用いた狩猟の場の発見は、昭和40年に官坂英丈先生により蓼科高原城之平遺跡においてなされ、落し穴の構造や落し穴が群在する点などから、集団による狩猟が行われていたことが想定されています。今回梵天原遺跡より検出された落し穴も、同種類のものが規則的に並ぶ点などから、城之平遺跡と同様な集団の狩り場であったことが明らかになり、当時の狩猟活動の状況を復元する上には重要な資料を得ることができました。

梵天原遺跡周辺の上見遺跡や稗田頭B遺跡などからも落し穴群が検出されており、この榎木の台地が狩猟の適地として頻繁に利用されたことがうかがえました。落し穴の明確な時期は不明ですが、榎木地区に集中する縄文時代中期初頭の聚落に伴うと考えると、この地域における生活領域の復元や遺跡間の相互関係を解明することに貴重なものと言えましょう。

榎木地区における埋蔵文化財の調査は平成2年度の上見遺跡に始まり、本年度の梵天原遺跡の調査をもって最終となりました。6年間に亘る調査により上見遺跡・中原遺跡・稗田頭A遺跡・夕立遺跡・稗出頭B遺跡・稗田頭C遺跡・梵天原遺跡の7か所の遺跡の記録保存がなされ、原始時代の榎木地区における重要な情報を得ることができました。これらの情報を基に榎木地区における地域史が再編され、当地における縄文時代のより具体的な生活の様子が解明されることでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、長野県諒訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課の皆様の深いご理解とご助力、調査ならびに作業にあたられた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成8年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 勝郎

例　　言

1. 本書は、長野県諏訪地方事務所長大西一郎と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成7年度県営園場整備事業根木地区に伴う、長野県茅野市梵天原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成7年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が平成7年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第1節5. 調査の体制として記載してある。
3. 発掘調査は平成7年5月19日から8月31日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は平成7年12月から平成8年3月まで茅野市文化財調査室において行った。
4. 発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第Ⅰ章第1節4に記してある。
5. 本報告書に掲載の土坑等の遺構実測図は1/60の縮尺とした。
6. 調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第VII系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
7. 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵保管している。

目 次

序 文

茅野市教育委員会教育長 両角 徹郎

例 言

第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
1. 調査に至るまでの協議.....	1
2. 発掘調査の方法とその経過.....	2
3. 調査日誌(抄).....	3
4. 遺物整理・報告書の作成.....	4
5. 調査の休制.....	4
第2節 発掘された遺構・遺物の概要.....	5
1. 遺構の概要.....	5
2. 遺物の概要.....	5
第Ⅱ章 遺跡の概観.....	6
第1節 遺跡の位置と環境.....	6
1. 遺跡の立地と地理的環境.....	6
第2節 遺跡周辺の歴史的環境.....	8
1. 遺跡周辺の遺跡とその地理的位置.....	8
2. 遺跡の研究史.....	10
第Ⅲ章 遺跡の層序.....	11
第1節 調査区の基本的層序.....	11
1. 土層の基本的な堆積状況.....	11
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物.....	12
第1節 縄文時代の遺構.....	12
1. 土坑.....	12
第2節 縄文時代・近世の遺物.....	29
1. 縄文時代の遺物の概要.....	29
2. 近世遺物の概要.....	30
第Ⅴ章 調査の成果と課題.....	31
第1節 梵天原遺跡の落し穴状土坑について.....	31
1. 検出された土坑の概要.....	31
2. 梵天原遺跡の性格と周辺遺跡との関係.....	33
第VI章 結 語.....	35
図 版	

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至るまでの経過

1. 調査に至るまでの協議

遺跡確認に至るまでの経過 本遺跡は周辺が水川として造成されている点や、採取された遺物が小量などもあり、その規模や時期・性格が不明で、特に遺構の広がりについては不明な部分が多かった。

本遺跡が県営園場整備事業拠木地区の対象となった時点に表面採集を実施したが、唯一残されていた畑地より黒曜石剣片が採集されただけで、遺跡範囲等について把握することはできなかった。遺跡の広がりを明確に把握し、遺跡の保存方法を考えるために試掘調査を実施する必要性が生じた。

試掘調査とその成果 本遺跡はその規模・内容が不明な遺跡であった。地形的な観点から考えると、分断する谷を持たない広大な山麓部であった点や、遺物採取の可能な範囲が限定されていたこともあり、遺跡の限界についてを現況より把握することは不可能に近い状況にあった。そのために遺構の分布状態の把握、旧地形の復元等を目的に試掘調査を実施した。試掘調査はトレーナーを表面採集の際に遺物の採集された地点を重点的に、台地を切るように幅2mのトレーナーを3m~4m置きに設定し行った。試掘の結果水川部は改変され旧地形を留めておらず、畑地部は耕作の搅乱が至っており、遺物の包含層の抽出、生活面の把握を行うことはできない状態であることが判明した。遺構は遺跡の中央部に位置する浅い入り組み谷を囲むように二群が、台地の南斜面側に二群が群となって展開することが把握された。その結果を踏まえ遺跡の範囲を東西約80m、南北90mとする。

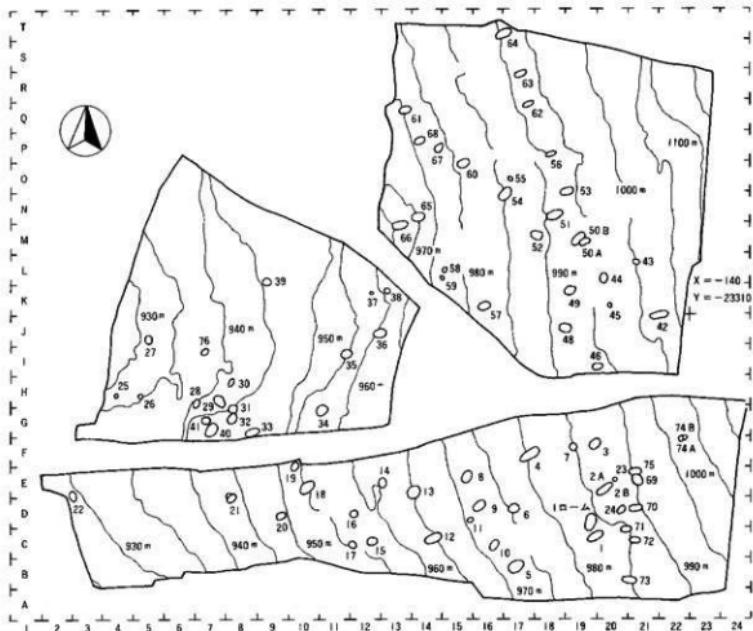
本調査に至るまでの協議経過と諸事務 半成5年8月12日に行われた平成6年度園場計画地内の遺跡の実地踏査が諏訪地方事務所土地改良課・茅野市農業基盤整備課・茅野市教育委員会文化財調査室において行われた。その結果記録保存の方向が決定されたが、遺跡の面積が不明確なために試掘調査を実施し、面積をしはり込む必要が指摘された。再度9月30日に行われた平成6年度県営園場に關わる埋蔵文化財の保護協議において、平成6年度の余休調査総量との関連等より本遺跡を調査することができるかどうかが懸案事項となり、遺跡の内容把握のためにも試掘調査を12月までに実施することを決定した。これを受け11月24日に試掘調査を実施した。平成6年1月18日に試掘結果を踏まえ再度協議を行い、総事業量の関係等より本遺跡の調査を平成7年度に繰り越すことを決定した。平成6年6月17日に実施された協議により平成7年度事業とすることに決定する。この協議結果に基づき、平成6年12月平成7年度文化財関係補助事業計画を提出した。それによると、7,200m²以上を県営園場整備事業拠木地区の実施に伴い緊急発掘調査を実施するというものであった。平成7年2月20日付6教文第7-11-1号、県営園場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)が長野県教育委員会より提出された。その内容は事業に先立ち7,200m²以上の発掘調査を実施し、記録保存を図る。発掘調査にかかる経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち農家負担分(12%)については文化財保護側が負担する。この計画は総額9,700,000円(農政部局負担8,536,000円、文化財負担1,164,000円)で事業を行い、発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。この計画を受け平成7年5月1日付7教文第6-4号、平成7年度県営園場整備拠木地区梵天原遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を諏訪地方事務所長大西一郎と取り交わし、文化財補助金申請等事務・発掘諸法令事務を下記の通り行った。

- 平成7年6月7日 7教文第1号 平成7年度文化財関係国庫事業について（通知）
 平成7年6月16日 7教文第2号 平成7年度文化財保護事業補助金の内示について（通知）
 平成7年6月22日 7教文第20-2号 平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
 平成7年6月30日 7教文第23-1号 平成7年度文化財保護事業補助金申請書提出
 平成7年9月27日 7教文第1号 平成7年度文化財関係国庫補助事業の交付決定について（通知）
 平成7年9月27日 7教文第2号 平成7年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）
 平成7年3月28日 6教文第109-7号 梵天原遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条3第1項）の提出
 平成7年3月28日 6教文第109-8号 梵天原遺跡埋蔵文化財発掘通知（98条2第1項）の提出

2. 発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法 試掘調査により遺構は台地全面に点在していることが把握された。試掘トレンチにより確認された遺構の分布を基に調査区範囲を決定し、表土の除去を重機により行った。台地頂部に遺構が散在していたために、当初予定していた調査範囲約7,200m²より調査区は広がり最終的には7,661m²の調査となった。

発掘区内のグリッド設定は、公共座標X=-140、Y=-23310を基準軸とし、この交点より5mピッチのグリッドを設定した。ベンチマークは公共座標の交点に1,100.989mを設定した。



発掘調査の方法と経過 試掘調査により遺構は台地を横断するように土坑が群をなし存在することが確認されていた。調査は工事工程等や、台地頂部に点在する土坑の展開等の関係からこの範囲より調査を5月23日より開始した。今年の夏期は敵暑に見舞われたが、天候的には安定しており作業は進展したが、遺構の広範囲に展開する点や、落し穴が深かった点、敵暑に伴う遺構部周辺の乾燥防止のための散水作業等の調査区保全作業等に大幅に時間を費やしたこともあり、最終的に現場における作業が終了したのは8月31日であった。

航空写真測量の実施 遺構の図化作業の短縮や省力化、遺跡全体、周辺の鳥瞰写真的必要性から航空写真測量を実施した。航空写真の撮影により台地内で落し穴がどのように展開するのかが視覚的に把握でき、落し穴配置全体の構成を考える上に重要な見地を与えてくれた。航空写真測量の実施後航空写真測量図の補足のために特徴的な土坑について平板測量図を作成し、写真測量図と合成した。また、土坑の断面については現場において作図作業と、レベル測量を併用して行った。なお、発掘現場における諸記録は守矢昌文、牛山徳博、塩原博子、藤原リカ子、平尾弘子、三宅三重子、宮坂ちよ江、宮坂ひとみが携わった。

3. 調査日誌（抄）

- 5月19日 発掘調査に先立ち機材準備と点検を行った後、機材を遺跡に搬入する。
- 5月23日 本日より発掘調査に入る。遺構の分布状況については、試掘調査により確認されていたために、大きな部分は把握できていたが、西側限界について未確認の範囲があったために、西側限界把握のために重機によりトレーニングを設定する。その後重機を用いて表土除去作業を行う。
- 5月25日 表土除去作業の継続する。試掘調査の結果の通り落し穴状の土坑が列を成して検出される。
- 5月30日 表土除去作業が進展しないために、表土除去の終了した範囲の土坑より半裁作業に入る。土坑の掘り下げは第1号土坑から第5号土坑までを行う。土坑セクション図作成のために仮ベンチマークとして仮BM1を設定する。長野県土地改良課東良主任と作業工程等について確認を行う。
- 5月31日～6月5日 調査区範囲の表土除去作業の継続。土坑の半裁作業と並行しながら、土坑の土層堆積状況の写真撮影と、セクション図の作成を行う。
- 6月6日 写真撮影、セクション図作成終了の土坑より掘り下げ作業を実施、1号土坑から7号土坑までの調査をほぼ完了する。
- 6月7日 表土除去作業の継続。土坑の掘り下げ作業の継続。セクション図作成のために仮BM1から-200cmに仮BM2を設定する。
- 6月8日 水田部の表土除去作業が進行する。水田部は尾根状台地の頂部を削り、その土を谷部の低い部分に埋め戻していることが判明する。掘り上がった土坑の第1号・第2号・第3号・第6号土坑・第1号ロームマウンドの写真撮影。
- 6月12日 仮BM2より-200cmの位置に仮BM3を設定する。
- 6月21日 表土除去作業の継続。第31号・第33号～第35号・第40号土坑の土層堆積状況の観察と写真撮影と、土坑の掘り下げ作業を実施する。
- 6月28日 遺構確認作業と、表土剥ぎ作業を継続する。土坑は一定の類型差により配列が異なるような傾向が窺える。調査KP-17グリッドより有茎尖頭器が検出される。
- 6月30日 第47号土坑の半裁作業を行うが、作業の結果本土坑は近代の野宿であることが判明したために欠番とする。
- 7月18日 航空写真測量の入札があり、株式会社東京航業研究所が落札し、入札後作業段取り等について打

合せを実施する。

- 7月25日 航空写真測量に備えて調査区全域の散水作業と、清掃作業を開始する。
8月4日 航空写真測量実施日。早朝より散水作業と清掃作業等最終確認。午前11時頃より撮影を開始する。
8月7日 航空写真測量図の補偏測量として、特徴的な土坑について平板測量・レベル測量を開始する。
8月31日 本日で調査を終了し、機材の搬出等を実施する。

4. 遺物整理・報告書の作成

遺物の整理 遺物整理・報告書作成が本格的に開始となったのは、発掘調査が終了した11月末からである。遺跡の性格上出土した遺物は少なく、黒曜石製有茎尖頭器1点、黒曜石製石鎌1点、黒曜石剥片等4点、磨石1点の他に近世陶器片が1点が検出されているに過ぎず、遺物の洗浄等の整理は短期間で終了した。注記の略号は遺跡番号の291を冠し、遺構名、地点・層位の順とした。

遺構平面図等の整理 遺構平面図は航空写真測量により得られた1/20の原図を、現場において遺構と対照し校正を行い、また、特徴的な土坑については平板測量図を作成し、航空写真測量図と合成して遺構平面図を作成した。1/100の全体図は1/20の原図を基に作成した。遺構断面図については基本的に現場において作成したが、遺構のレベル測量成果を基に作成したものもある。セクション図は遺構の重複関係、遺構の埋没状況の把握等を行った。なお、坑底ピットについては規模等の関係からセクション図に取り込むことができなかったが、坑底ピットを掘り下げる際に土層の堆積状態について観察を行った。航空写真測量の導入により測量の省力化が図れ、落し穴が全体の地形の中にどのように展開するのかを把握するためにその成果は有効であった。

報告書作成の方法と経過 石器・剥片の実測図は委託により実施した。報告書の作成、原稿の執筆は守矢が行った。今回の調査により検出された「穴」について、現場においては「土坑」と表記し取扱ったが、報告書中においてはその形状等より性格が推定され得るものについては、積極的に性格名称を附した。そのため「土坑」としたものの中より落し穴を分離している。なお、陥穴の表記を落し穴としたが、他意ではなく、陥穴=落し穴である。

5. 調査の体制

調査主体者 両角昭二 (茅野市教育委員会教育長 平成7年4月1日より9月30日)

両角徹郎 (茅野市教育委員会教育長 平成7年10月1日より)

事務局 宮下安雄 (茅野市教育委員会教育次長)

両角英行 (文化財調査室長) 鵜飼幸雄 (文化財調査室係長) 守矢昌文 小林深志 大谷勝己 功刀司 小池岳史 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

調査担当者 守矢昌文 調査補助員 牛山博博

発掘調査・整理作業協力者 植松博視 鵜飼澄雄 木川文詞 小平三行 小平義市 栗原昇 塩原博子 篠原リカ子 武田ケサ子 長田真 花岡照友 林靖之 原ちよ子 半尾弘子 三宅三重子 宮坂ちよ江 宮坂ひとみ

基準点測量委託：株式会社両角測量 遺構測量委託・遺物測量委託：株式会社東京航業研究所

発掘調査期間中、諒訪地方事務所土地改良課並びに、櫻木区画場整備委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し明記したい。長野県教育委員会文化課埋蔵文化財係指導主事原明芳氏をはじめ下記の方々より有益なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝を申し上げたい。

宮板光昭 武藤雄六 青木正洋 五味裕史 小安和順 中西真也 斎藤弘 宮坂清

第2節 発掘された遺構・遺物の概要

1. 遺構の概要

検出された遺構の概要 検出された遺構は七坑とロームマウンドだけである。土坑をその形状より観察すると、落し穴とすべきものと、用途の不明な「穴」の2者が認められる。本遺跡から検出された遺構はその性格上から直接遺構内より時期を示す遺物等の資料を検出することはできなかった。しかし、検出された遺構の構造等から推測すると、検出された遺構は縄文時代に帰属するものと考えられる。落し穴が群をして一定の配列を持ち検出したことにより、当時の狩猟領域を考える上に重要な所見が得られた。

検出された遺構の時期とその構成 検出された遺構特に落し穴はその形状等より縄文時代に帰属するものと思われるが、詳細な時期を示すような根拠は得られてはいない。しかし、落し穴には様々な類型のものが認められ、重複関係を有するものも認められることを考慮すると、一時期に落し穴が構築されたのではなく、ある程度の時間幅の中で構築されたものと理解できる。落し穴はその特徴的な形状より他の七坑との区別が可能であるが、稀に上面が水田造成により削平され平面形状が変形しているものが見られたが、落し穴の特徴の一つである坑底ピットに着目し、これらの要件を具備するものについても落し穴として取り扱った。その結果落し穴51基、土坑27基、ロームマウンド1基を確認した。なお、土坑内で近代に帰属すると思われる野溜めが1基検出され、そのために土坑番号第47号が1ヶ所欠番となっている。

これらの土坑特に落し穴は単独で存在するのではなく、ある程度の群を形成していたことが窺え、これらの落し穴が規則的に配列することによって「狩り場」を形作っていたものと考えられる。

遺構の特性から覆土内に遺物を含まず、時期を決定し得ていない土坑が大半を占める。特に落し穴と思われる土坑は遺物を含有していない例が多く、積極的に時期決定をし得てはいないが、重複関係や落し穴のタイプより考えると、かなりの時間幅があるものと考えられる。

遺構名の取扱い 土坑については地下に掘り込まれた「穴」を指し、小豊穴・土壙と総称されている遺構である。土坑と括した内には落し穴、貯藏穴等が含まれており、単純に土坑=墓穴ではなく、土坑は多岐に亘る「穴」を総称している。落し穴については土坑群内より諸属性より分類し、土坑とは分離して取扱うべきかもしれないが、今回は現場での遺構の取扱いに準じた。

2. 遺物の概要

検出された遺物の概要 検出された遺物の量は遺跡の特性からか、その量は少なく土器等の検出はない。検出された石器等は総量にして688.9gを測り、点数にして7点に過ぎない。これに混在する形で近世陶器が検出されている。

縄文時代の遺物 遺物の主体をなすものは縄文時代の資料と思われる黒艶石製の石器と剝片である。検出された遺物が石器である点などより、その特徴から時期を明確にはし難いが、有茎尖頭器が1点得られることより、縄文時代草創期からこの遺跡が存在していたことが窺える。この資料の他に石錐1、剝片4が得られている。剝片は全て和田神周辺産の黒艶石が用いられている。剝片剥離等に一定性の窺えるものは見当らない。この他の石器として安山岩製の磨石1が検出されている。

近世の遺物 近世に帰属する資料は染め付け陶器片1と瀬戸・美濃窑系陶器片2が得られている。これらの資料は直接本遺跡に関わるものではなく、近世の水田造成や耕作に伴って耕作地に混入したものと捉えることができよう。

第II章 遺跡の概観

第1節 遺跡の位置と環境

I. 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の位置 梵天原遺跡は長野県茅野市泉野3,900番地他（櫻木）に所在する。遺跡の位置する泉野地区は市域の南東に位置し、梵天原遺跡はJR中央本線茅野駅から東方向に約8kmのちょうど八ヶ岳の南西麓に位置し、遺跡の位置する台地南直下に泉野上櫻木の集落が位置する。

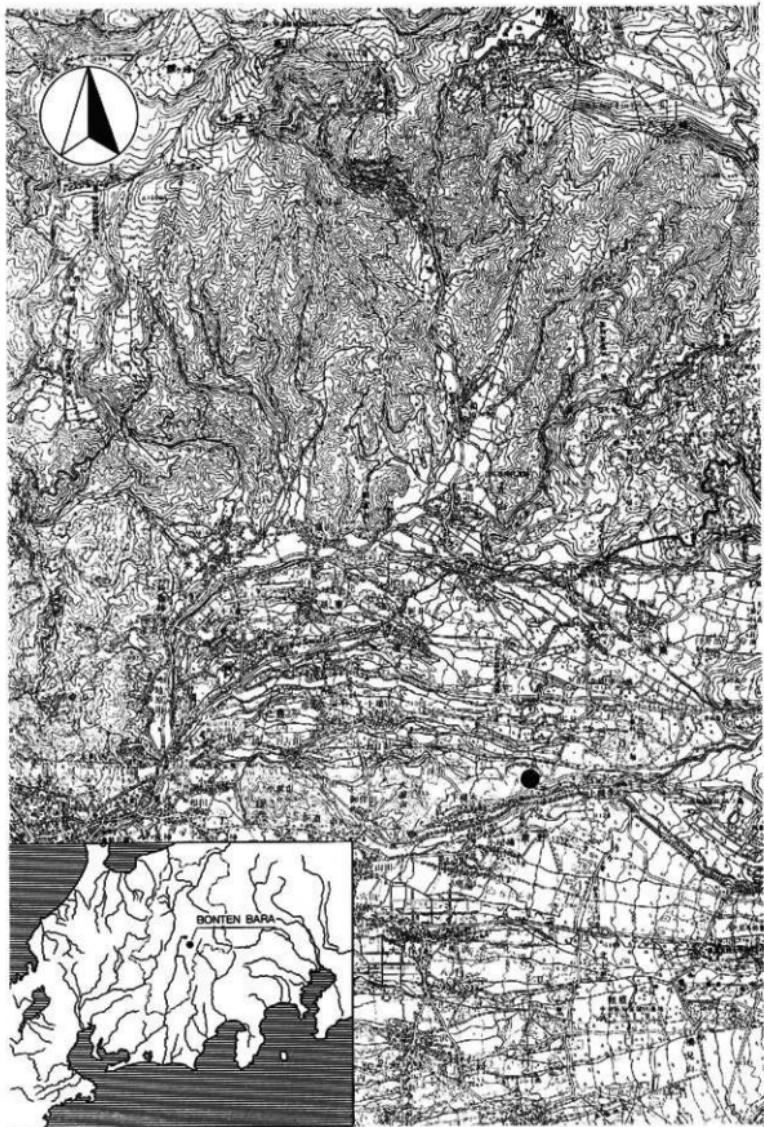
遺跡の地理的環境 梵天原遺跡は八ヶ岳の火山活動により形成された台地上に位置しているが、台地は開田により大きくその様相は改変され、詳細な当時の姿を遺存しているとは言い難い状況にある。

本遺跡の立地する台地をE-W視的に見ると、八ヶ岳のほぼ中央部に位置する天狗岳を起源とする、新八ヶ岳の活動期の噴出物により形成された、第II段丘面の南側端に位置している。柳川を隔ててそれ以南の南八ヶ岳西南麓の古八ヶ岳期の段丘と対峙し、柳川の流れる部分は深い谷となっている。本遺跡の立地する台地の西側端には第3紀花崗岩類の隆起による大泉山が位置し、そのために本遺跡の立地する台地範囲は台地内の先端部とは大泉山の部分で隔離された状態となっている。

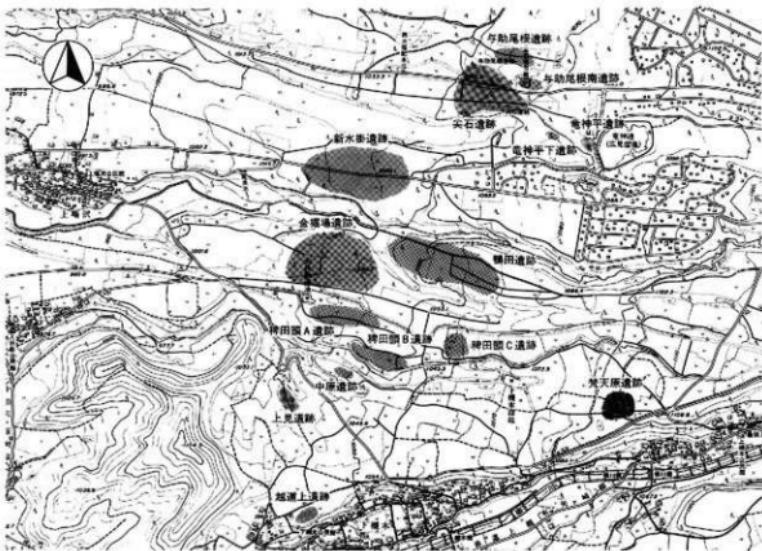
本遺跡の立地する地形は前にも記したように水田造成に伴って旧地形は大きく改変され、繩文時代の地形を窺えるような部分は少ないが、地図上より推定すると、大きく広い一つに見える台地も本来は部分的に分岐し、台地間には小規模な谷が形成されていたものと思われ、現在単純に大きな地盤状台地と見られるものはかなりの入り組み谷を有する複雑な地形であったことを想定できる。この点を加味して本遺跡周辺の旧地形を復元すると、本遺跡周辺は中原遺跡・上見遺跡の立地する台地と、稗田頭A・B・C遺跡が立地する台地とが大きく分岐する部分の、入り組み谷の最も奥間った位置に本遺跡は立地している。本遺跡や中原遺跡・上見遺跡の立地する台地は北西方向に向かって小規模な尾根に分岐し延びる傾向を示しているが、柳川の沖積段丘面と接する南側斜面部分は、柳川の浸食作用によるためか段丘崖状となり、本遺跡の立地している台地上と柳川の沖積段丘面との比高差は約39mを測り、切り立った崖状となる。

本遺跡の立地している台地は現状の表面観察においては、大きく広い台地としか捉えられないような地形であったが、実際に畠地や水田により改変された部分を剥ぎ取ってみると、遺跡周辺の原地形はかなり複雑な地形を呈していたことが把握できた。それによると、遺跡の中心となる範囲は東西方向に延びる幅約の尾根状を呈し、西側先端部に至るにつれ浅い谷に分岐する傾向を看取ることができた。台地内において遺構が分布する範囲は尾根状地形の最も幅の広い部分を中心に、この部分を横断するような範囲に分布している。また、地形と遺構分布を照らし合わせてみると、西側先端部に分岐する浅い谷をかなり意識して展開しているような傾向が窺える。

落し穴を中心とした遺跡ということで、遺跡の範囲を確定することは難しい部分があるが、遺構の分布や地形の状況等より推定すると、園場整備事業地区外である南側範囲に遺構が展開する可能性が十分考えられ、遺跡面積を推定すると、東西方向約140m、南北方向約100m、面積約1,400m²の範囲を想定することができようか。現在遺跡内に湧水の頗るに認められる範囲はないが、地形より推定すると西側先端部に位置する浅い谷の分岐部に若干の水が湧出していた可能性が考えられるが、現在水が湧れている点より小規模な湧水であったものと推定でき、生活するには適地とは言い難い地域である。



第2図 梵天原遺跡位置図 (1/37,500)



第3図 周辺の遺跡とその地理的位置 (1/20,000)

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

I. 遺跡周辺の遺跡とその地理的位置

周辺の遺跡の地理的位置 本遺跡の立地する柳木地区は、東西に流下する柳川により大きく2分割され、南側が割合起伏の少ない平坦な台地であるのに対して、北側の北八ヶ岳西麓は南八ヶ岳南西麓に比べると全体として、火碎流の堆積が複雑となっており、笠原面（広見面）・南大塩面・芹ヶ沢面・上川面などに分かれている。本遺跡の位置する箇所は笠原面の一部に位置し、かなり複雑な火碎流による尾根状の段丘が発達している。このような地形的な要因により遺跡の分布状況等に差異を見出すことができる。

南八ヶ岳南西麓の台地に立地する遺跡 南八ヶ岳南西麓は柳川を挟んで対峙する北八ヶ岳西麓とは地形に相連点が認められる。南八ヶ岳南西麓の台地は割合起伏が少なく、北八ヶ岳西麓のような明瞭な分断した地形を見ることはできない。本遺跡の柳川を隔てた対岸の遺跡は馬捨場遺跡（170）、山之神遺跡（171）、丸生戸遺跡（172）、城山城跡（173）、菖蒲沢III遺跡（174）、菖蒲沢II遺跡（175）、菖蒲沢I遺跡（176）が位置する。これらの遺跡は南八ヶ岳南西麓台地の柳川に面する脇が小さく入り組み谷となる部分にある程度集中して分布する傾向が窺えるが、遺跡規模の大きなものは見られず、その性格の不明なものが多い。

北八ヶ岳西麓の台地に立地する遺跡 本遺跡の立地する北八ヶ岳西麓には、東西方向に走行する分断された台地が形成され、台地上には国特別史跡尖石遺跡等多くの縄文時代を中心とする遺跡が点在しているが、本遺跡周辺はその中において割合遺跡分布の稀薄な範囲と認識されてきたが、平成2年度より県営圃場整備事業が実施され、上見遺跡（168・平成2年度調査）、中原遺跡（92・平成3年度調査）、稗田頭A遺跡（91・平成4年度、6年度調査）、稗田頭B遺跡（209・平成5年度調査）、稗田頭C遺跡（304・平成5年度調査）

が調査されるに至り、一定の遺跡群を構成していることが把握された。これらの遺跡は梵天原遺跡の立地する台地の先端部、西側に約1,000m離れた範囲に集中し分布している。これらの遺跡は東西方向に走る谷に分断され隣接する関係にあるが、個々の遺跡の時期や位置関係等から大きな遺跡群を形成していることが把握され、中期初頭に在っては相互関係を保有していたものと想定されている。これらの遺跡について本遺跡と関連付けられる点を中心にその概要を記述する。

上見遺跡 北西側に突き出るように延びた、先端部が小さく分岐する尾根状台地に位置し、造構は先土器時代の遺物ブロック、縄文時代中期初頭の土坑、落し穴群が検出されている。落し穴群は台地の先端部からやや奥まった位置に、台地の長軸に沿った形で波状に一列に並んでいるが、その配列や構造とより約4群の構成に群別できるようである。落し穴中で4基より中期初頭の土器片が検出されているが、落し穴以外の土坑が中期初頭に帰属する点などを考慮すると、落し穴は土坑構築以前に構築されたものと考えられよう。居住造構を有せず、土坑と落し穴の組合せとなる点は梵天原遺跡に共通するものがある。

中原遺跡 上見遺跡と深い谷を挟んで北側に対峙する遺跡で、東西方向に延びる細長い台地上のほぼ中央部に位置している。台地の規模等小規模であるが、台地頂部と谷の沖積地面との比高差は7mを測り、台地の縁辺は切り立った崖状を呈する。検出された造構は縄文時代早期末堅穴住居址2軒、中期初頭1軒、土坑7基が検出されている。この内の1基が落し穴である。落し穴は単独で検出され、群をなしてはいなかった。また、興味深いことにこの落し穴は廃絶後炉として転用されており、まるで炉穴のような状態を示している。

稗田頭B遺跡 中原遺跡の北側深い谷を挟んだ北側の台地先端部に位置する。造構は台地が分岐し始めるほぼ中央部に展開し、台地頂部よりやや南側に寄った位置に縄文時代中期初頭堅穴住居址9軒、土坑53基、落し穴13基が検出されている。落し穴の配列は台地の南側斜面の肩部に台地の長軸に沿った形で、やや不規則ながら2列の配列が認められる。この列から離れて単独で台地中央部に1基落し穴が検出されている。この落し穴は南側台地肩部に展開する落し穴群の長軸方向が南北方向に在るのに対して、約90°振れた東西南向と成っており、これらの点より群別が可能であろう。4基の落し穴内より縄文早期末・中期初頭の土器片が出土しているが、集落との関係や第7号土坑上面に構築されていた集石等から落し穴は早期末以前に機能してた可能性が高いと言えよう。直接関係はないが、第7号土坑の廃絶後の上面利用のあり方は中原遺跡の落し穴廃絶後の炉への転用と類似する部分があり、興味深いものがある。

稗田頭A遺跡 稗田頭B遺跡と北側に谷を挟んで対峙する尾根状台地の先端部に位置する。造構は台地の頂部に縄文時代中期堅穴住居址30軒、土坑450基が検出され、中期初頭から後期前半まで断続的ながら造構が検出されている。落し穴は7基が検出されているが、その配列より大きく2群に分類が可能である。西群は台地先端部に台地を横断するように4基が並び、この列より約90m離れて東群が検出されている。西群列が北西-南東方向に並ぶのに対して、東群は弧状ながら北-南となり、また、西群を構成する落し穴と東群を構成する落し穴は規模や構造に差異が見られ、西群と東群が同時に存在したとは考えがたい。なお、落し穴の長軸方向は台地の軸方向を向くものが多い。落し穴の時期について明確な資料は得られてはいないが、東群の落し穴が中期最終末から後期前半に帰属する敷石住居址より検出されている点から、中期最終末以前に落し穴を帰属させることができよう。

稗田頭C遺跡 稗田頭A遺跡と稗田頭B遺跡の立地する台地が上部で合致し、幅広の割合平坦な台地となる部分に本遺跡は立地する。造構は台地の中央部よりやや南側に寄った位置に縄文中期初頭堅穴住居址9軒、土坑75基が展開しており、土坑を中心とした遺跡であるが、上記した遺跡とは異なり落し穴は検出されてはいない。



第4図 周辺の地形と遺構分布 (1/1,500)

上記した遺跡と本遺跡を直接関連できるような要素は得られてはいないが、本遺跡の遺構の主体となる落し穴に着目すると、上見遺跡・中原遺跡・稗田頭B遺跡・稗田頭A遺跡は深い谷により分断されている尾根状台地の先端部、若しくは南側斜面肩部に落し穴が作られ、群を成し列状に並ぶもの（上見遺跡・稗田頭B遺跡・稗田頭A遺跡）と、単独のもの（中原遺跡）が存在することが把握された。また、落し穴の構造に着目すると、割合長軸値と単軸値の割合が比較的近く、坑底中央部に1か所程度の小ピットが穿たれるものと、幅が狭い細長い平面形を呈し、坑底に数箇所の小ピットを有するもの（稗田頭A遺跡第2次調査59号・118号・110号土坑）が認められる。この2点の傾向は本遺跡でも認めることができ、上見遺跡・中原遺跡・稗田頭B遺跡・稗田頭A遺跡との関連を窺うことができる要素と考えられよう。本遺跡の落し穴の時期を直接示すような要素は得られてはいないが、落し穴の形態等を考え合わせると、稗田頭B遺跡・稗田頭A遺跡等の例などを参考にする必要があろう。

2. 遺跡の研究史

今回の発掘調査以前の考古学的調査 榛木地区は縄文時代の遺跡が密集している八ヶ岳西南麓の中において、あまり遺跡分布の濃い地域とは言いかつたかった。八ヶ岳西南麓の遺跡を精力的に調査してきた宮坂英太氏も榛木地区において数箇所の遺跡を踏査しているが、本遺跡については未調査のままで、周知されていた遺跡ではなかった。昭和54年度に実施された八ヶ岳西南麓広域遺跡保存対策調査研究の際や、茅野市史における調査では未確認の遺跡であったが、平成2年度から平成6年度にかけて県営圃場整備事業榛木地区が施工されることとなり、該当地区周辺の遺跡分布調査を実施し、本遺跡の存在を把握した。本遺跡の性格上遺物の散布は少なく、また、周辺が水田として造成されていたこともあり、その存在が不明であったものと考えられよう。

第III章 遺跡の層序

第1節 調査区の基本的層序

I. 土層の基本的な堆積状況

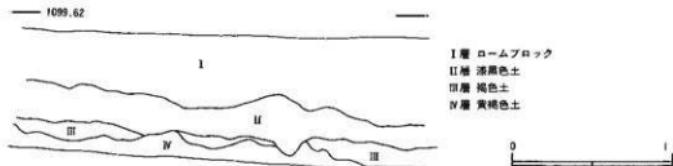
本遺跡の立地している台地は、八ヶ岳起源の火山堆積物である泥・砂・礫・上層部を新期ローム層等を基盤としており、この上部に有機物腐食物の堆積物である黒色土が堆積し台地全体を形成している。台地の南側の柳川段丘崖などにはこれらの堆積状況が現れる部分が見られる。斜面部や入り組み谷部では上部に堆積していたローム層が流出しており、ローム層下部に堆積する軽石等の砾を含むハードローム層が露出している部分が見られた。

調査区全体は耕作による擾乱がいたる部分に亘っており、プライマリーな土層の堆積状況を調べられる地点はごく限られた部分だけで、下記に図示説明を加えてある地点は調査区の南側A-21グリッド南壁に該当する。この部分は水田造成の際に埋め立てられていたために従来の層序が整然と遺存していたため、この地点を選定した。発掘調査において縄文時代草創期と思われる遺物や近世の遺構が検出されているが、生活面の分層には至ってはおらず、文化層による分別はできなかった。

- I層 ロームブロック 現在の水田造成に関わる床下の埋め土である。10cm大のロームブロックを客土として用いている。客土層はあまり突き固められてはいらず、ロームブロック間に隙間が見られた。
- II層 漆黒色土 色調は濃い黒色を呈し、縮まりが割合あり硬質な傾向を呈する。内部には微量ではあるが、1mm~2mm大の炭化物が散漫な状態で観察できる。土層はほぼ水平に堆積している。
- III層 褐色土 色調はやや黒色が強く、縮まりがあり割合硬質である。内部に1mm大のローム粒子を均一に混入する。土層は西側に傾斜する形で堆積している。
- IV層 黄褐色土 全体的に黄色味が強く、ソフトローム層との区別が難しい。全体的にソフトで粘性を有する。ソフトローム層に至る漸移層である。

土層を大きくその性格よりI層からIV層の4群に分類した。I層は現在の耕作や畑造成に関わる土層で、II層以降が正常な土層と考えられる。

有茎尖頭器の出土があったために、IV層以下についてもP-16・17、L-18において掘り下げたが、ローム層内に遺物の包含は認めることはできなかった。



第5図 遺跡の基本層序 (1/30)

第IV章 検出された遺構と遺物

第1節 繩文時代の遺構

I. 土坑

土坑は地表面に掘り込まれた「穴」を指し、所謂土壙や小豈穴、木の根による擾乱孔等を全て総称しており人為・自然を問わず遺構確認の段階において確認面下に掘り込みが確認できた「穴」全てについて番号を付し土坑・ピットとして取扱った。本来ならば「穴」の意味合いに応じてその名称も落し穴や墓壙、貯藏穴等に区分して所見・報告しなければならないと考えられるが、今回得られたデーターからはこれらを明瞭に区分するだけの情報を得ることはできなかった。土坑内には「落し穴」とされる特徴的なものが含まれております、これらについては本来ならば土坑内から分離して取り扱わなければならないと思われるが、今回は遺構確認を行い遺構番号を附する段階で土坑の大別を行わず、全ての「穴」について連番を附したために土坑番号の煩雑さを避けるために、土坑内を性格において取て分離せず一括して捉えることとした。

土坑（第6～15図、図版1～2）

今回の調査において多くの土坑が検出され、番号を付したもので78を数える。これらの内遺物が検出されたものは皆無で、時期を明確にすることはできなかった。形態的に分類すると明らかに相違のあるグループが存在し、土坑と大きな一群として括られるものではなく、多種多様な坑のグループとして取り扱いたい。

土坑の分類 土坑を分類する際に大きな基準となるものは、坑の規模や構造（掘り方等）によるところが大きい。なお、規模特に上面形や深さの細かな数値については検出面の状況により異なりがあり、そのため概略的なまとめ方が適当であると思われる。これらの要件を加味し今回検出された土坑を大別すると、I群・II群に分類することができる。

また、規模や構造の要件に土層の堆積状態が加わる。特に坑の掘り方は土坑の役割に大きな影響を持っていたものと考えられ、細かな観察を必要とする要件である。これらの事情を踏まえて群別での土坑を図示し記述する。

第I群 上面形の規模がII群に比較して大型で、その掘り方もしっかりとしている一群であり、II群が簡易な構造を有する坑であるのに対して、I群は目的に応じた構造を有する坑であることに特徴を持つ。上面プランにより数種の類型に大別が可能であり、坑底の形態や坑底孔等の構造の状況により更に数種に細分が可能である。

第I群1類 上面プランの平面形が長楕円形となる一群で、坑底規模やその形状、坑底に穿たれている小孔の状況により細分が可能である。

第I群1類A種（第1・2・4・18・54・33号土坑） 上面プランの平面形が長楕円形となり、長軸規模が大きく全体規模の大きな群である。本種は開口部以下の中段・坑底に特徴を持っている。中段・坑底の上面プランは幅の狭い長楕円形を基調としている。しかし、第18号土坑（第6図4）のように端部がやや広がり、丁字形に変形するものも認められる。規模的に最も細長い形態のものは、第1号土坑でその幅は38cmを測り、まるで溝状な様相を呈する。中段から坑底への掘り方はしっかりとしており、直線状に立ち上がる。坑底の構造を観察すると、中央部がやや膨らみ端部が低く凹む傾向のものが主体を占める。特に第4号（第6図3）・第18号土坑にはその傾向が強い。また、第18号土坑の坑底端部の一部は袋状に入り組んでいる。坑

底に穿たれる小孔は直径が7cm前後の細いものが主体を占め、深さも平均すると約20.4cmと浅く、貧弱な小孔と見えるものである。小孔の数は他の類型に比べて多く、2~4個が固まって配されることを特徴とする。小坑が穿たれる位置は中央部より左右にそれぞれ寄った位置に配するものが主流を占めるが、第4号土坑（第6図3）のように中央部にも設けたものも見られる。なお、2か所の範囲に小孔を設けるものは、坑底の長軸を約3分割する位置に小孔を穿つ傾向が認められる。

第I群1類B種（第42・51・40・50A・12・66・64号土坑） 上面プランの平面形や長軸規模のあり方、中段・坑底の特徴は1類A種に類似するが、坑底に穿たれる小孔の状態がA種とは異なることからB種として分類した。B種の坑底の小孔はA種に比べて掘り方もしっかりしており、その規模も大きくなり、直径は2.7m前後、深さも平均すると88.3cmとA種に比較して深い。特に第12・66・64号土坑の小孔は顕著である。小孔は2か所のものと、3か所のものが認められる。なお、第64号土坑の場合小孔内には上層観察の結果、複数の杭状のものが立てられていたことが観察されており、この点が本種の特徴ともいえ、A種の小孔の密集構築法に近縁関係を求めることができようか。A種に見られたような坑底の傾斜等は観察されず、坑底がやや皿状となる傾向が窺える。また、底端がやや丸みを持ち立ち上がる傾向も見られた。

第I群1類C種（第50B・53・56・62・75・63・70・72・73号土坑） A・B種よりも長軸の長さが短く、幅の狭い中規模の規格を持つ類型である。本類の典型的なものは第53号土坑である。本類の特徴は坑底の形状と、底に穿たれた孔の位置にある。坑底の規格は今回検出された土坑の中で最も狭いもので、平均すると27.8cmとなり、土坑内で身動きが取れないような状態である。中段から坑底までは直に近い形で掘り込まれしっかりしている。坑底はほぼ平坦で長軸方向の両端の部分に小孔が穿たれる。小孔の直径は平均すると15cmで、その掘り方はしっかりしているが、その深さは余り深くない傾向が見られる。

第I群2類 第I群1類に比較して本類はより円形に近くなり、平面プランが梢円形を基調とする群である。坑底に穿たれる小孔の数や、坑底の形状等によりA種からC種の3種類に分類することができる。

第I群2類A種（第10・35・61号土坑） 平面プランが円に近い梢円形を呈しているが、B種とは平面プランにおいては大きな相違はない。坑底の平面プランは隅丸長方形を呈し、第I群1類に比較して幅が広がる傾向が見られる。中段から坑底にかけての掘り方は、第I群1類よりもやや斜状に立ち上がる傾向のものが主体を占める。坑底はやや皿状に凹む傾向が見られる。坑底に穿たれている小孔は、中央部に寄った位置に割合しっかりした掘り方のものが2か所穿たれている。第35号七坑のものは3本を一組とした逆茂木を、1か所の小孔に差し込んだような状態が観察できた。坑底に穿たれた小孔の数にこだわらなければ、基本的には第I群2類B種と構造等については大きな相違を見ることはできない。

第I群2類B種（第3・8・14・20・21・22・24・34・46・48・49・52・60・65・67・68・71号土坑） 本類型が土坑の中で中心的なものである。構造は第I群2類A種と類似している。坑底の中央部に1か所のしっかりした小孔が穿たれているが、第48・49・52・67号土坑のように他とは小孔の規模が小さく、割合貧弱なものは本種から分離すべきであろうか。

第I群2類C種（第5・9・13・57号土坑） 上面プランの形状が円形に近くなり、土坑の掘り方は他の類型に比較して割合斜状となり、断面形は坑底より上面に向かって大きく開く形を呈し、中段等の区分は明瞭ではない。全体的に坑底の規模が小さく、その中央部に1か所小孔が穿たれる。小孔は割合しっかりした掘り方を持っているが、その深さは余りないものが主体を占める。

第I群3類 1類が長梢円形、2類が梢円形の上面観を呈するのに対して、本類型は上面観が円形を基調とする。基本的な構造は2類のものとほとんど相違が見らず、坑底の小孔の状況等による細分はできない。

第Ⅰ群3類△種（第16・19・31・76号土坑） 上面プランが不整形な円形を呈している。掘り方の深さは余り深くはないが、掘り方は割合しっかりした直線的な掘り方を持っており、上面形の規模と坑底の規模値が割合似通った値となる。坑底は平坦になるもの（第16・31号土坑）と、中央部に向かって緩やかな傾斜を有するもの（第19・76号土坑）が見られる。坑底の中央部には掘り方の割合しっかりした小孔が穿たれているが、第16号土坑に見られるように1か所の掘り方内に複数の逆茂木状のものを埋め込むものも認められた。

第Ⅱ群 第Ⅱ群は第Ⅰ群に比べてその構造が簡易となる群で、掘り方が浅いものが主体を呈する。平面形は円形を基調とするものと、楕円形を基調とするものが認められるが、全体的に不整形である。平面形、坑の規模、掘り方等により分類が可能である。なお、第Ⅰ群に帰属する土坑が目的に応じた構造を有するのに對して、本群はその構造より土坑の目的を直接窺い知ることができにくいものであり、多種多様なものを内在している一群かと思われる。

第Ⅱ群1類 上面観が不整形圓形を呈するものを一括した。土坑の規模や掘り方の状態によりA種からE種までの5種に分類できる。

第Ⅱ群1類A種（第7・11・17号土坑） 上面プランは不整形な円形を呈し、掘り方は割合簡易で、断面形が皿状を呈するものである。なお、坑底の上面観が不整形にゆがみ、凹凸を呈するものが主体を占める。

第Ⅱ群1類B種（第27号土坑） 上面プランや坑底プランは第Ⅱ群1類A種と同様な傾向を示すが、断面形がフラスコ状を呈し、第Ⅱ群の中でも深い様相を呈する特徴的な特徴を持つ。坑底は平坦で掘り方もしっかりしており、第Ⅱ群の中で最も整ったものである。

第Ⅱ群1類C種（第23・26号土坑） 土坑の形態等については第Ⅱ群1類A種と類似する傾向にあるが、規模がA種よりも小型化する類型を本種としたが、詳細に検討するとA種よりも不整形な傾向が窺える。

第Ⅱ群1類D種（第38・45・74号土坑） 基本的な形態等はC種と大きな差異はないが、C種の断面形が不整形な皿状を呈するのに対して、本種は箱状となるものである。

第Ⅱ群1類E種（第37号土坑） 1類の中で最も規模の小さなものである。平面プランや断面形はD種に近いものがあるが、小規格であり柱穴と類似する。

第Ⅱ群2類 平面観が楕円形を呈し、第Ⅱ群1類に比較すると土坑の規格が不整形となる類型である。平面観や規模により2種に細分が可能である。なお、本類型は第Ⅱ群1類よりも簡易な構造の土坑群である。

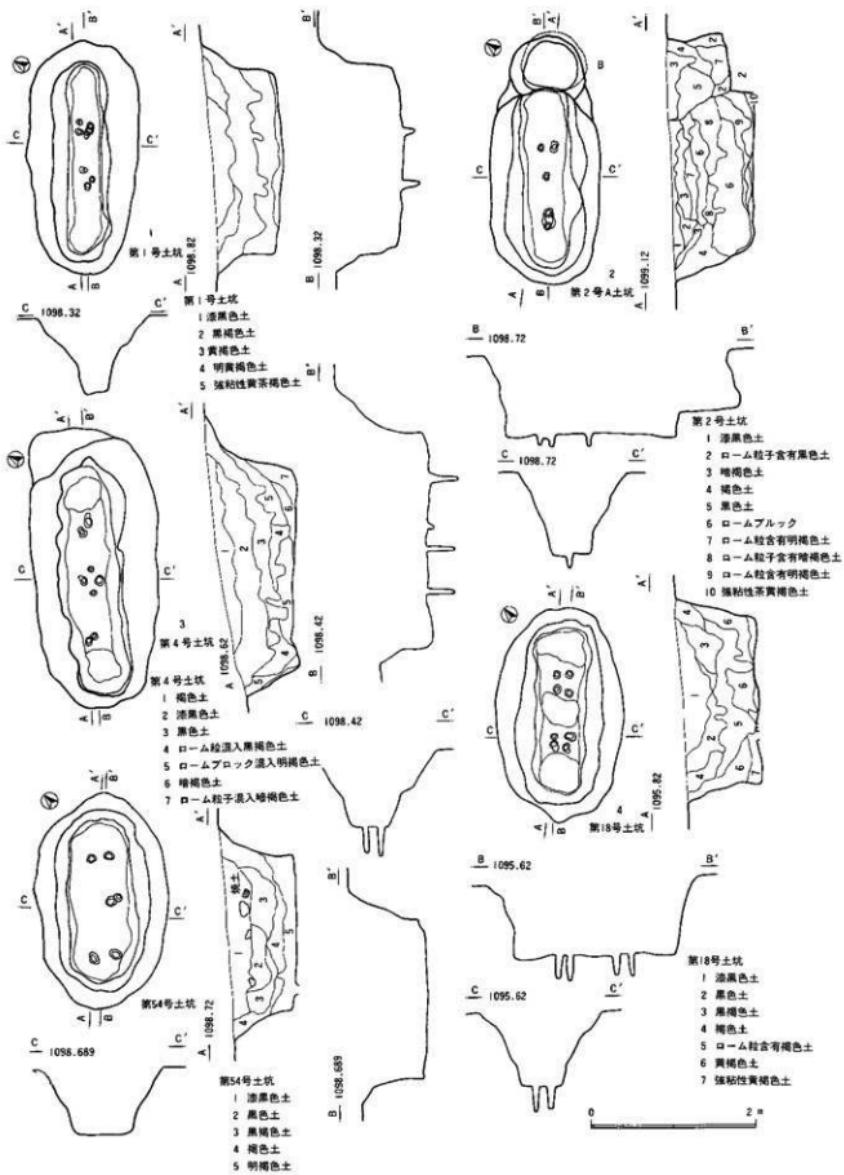
第Ⅱ群2類A種（第6・15・36・39・29・44号土坑） B種に比較して規模が大きく、長軸の平均値は約1.8mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、坑底は小さく凹凸を呈するものが主体を占める。

第Ⅱ群2類B種（第20・30・35・43号土坑） A種よりも平面観は長楕円形となり、より不整形な状況となる。掘り方等も簡易で浅い皿状となる。

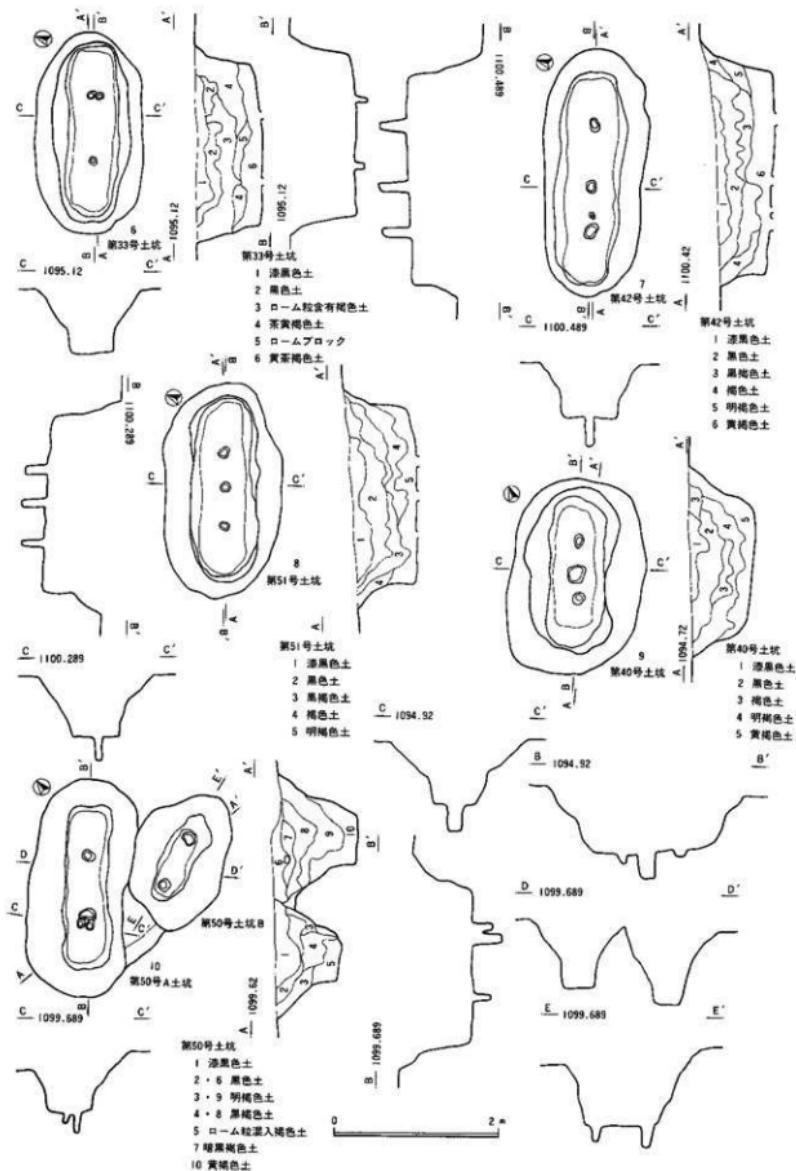
土坑の構造 今回検出された土坑を平面観や断面観を基本として分類を行ってきた。第Ⅰ群（落し穴）上坑の分類については、^③神奈川県藤ヶ丘遺跡等において詳細に検討されている。今回本遺跡において行った土坑の分類と藤ヶ丘遺跡の分類に準拠すると、第Ⅰ群1類A種はA2型に、第Ⅰ群1類B種はB2型、第Ⅰ群2類A種はC型に相当しようが、第Ⅰ群1類C種は他の遺跡では余り類例のないものである。

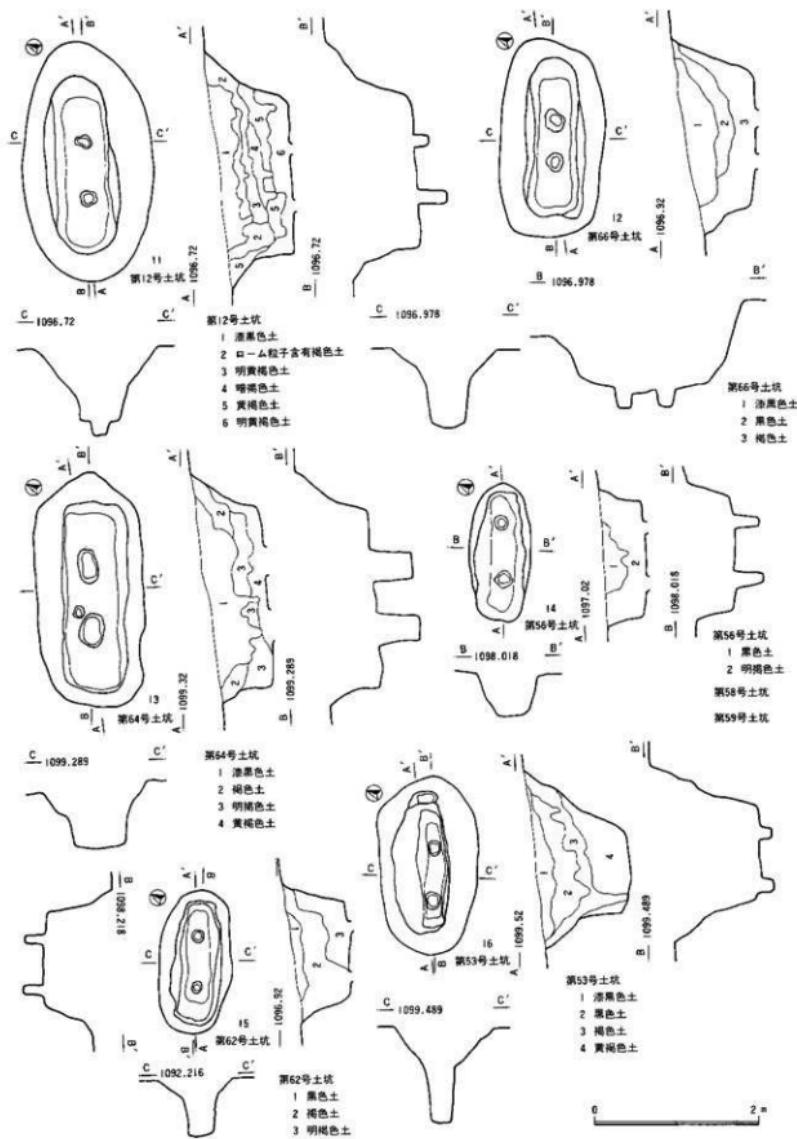
これらの群類に準じて土坑の構造を断面形から概観して見ると、第Ⅰ群の土坑の掘り方は基本的に二つの構造より形作られているものと考えることができる。

第Ⅰ群が開口部を大きく開き、中段部から坑底にかけての幅が狭い漏斗形のものを基本とするのには、開口部を落し捕獲する部分、中段から坑底までを捕獲したものが身動きできなくなるよう拘束する部分と、部位による目的が定まっていたからだと考えられ、身動きな取れないような幅の狭い坑底は本群の土坑の基

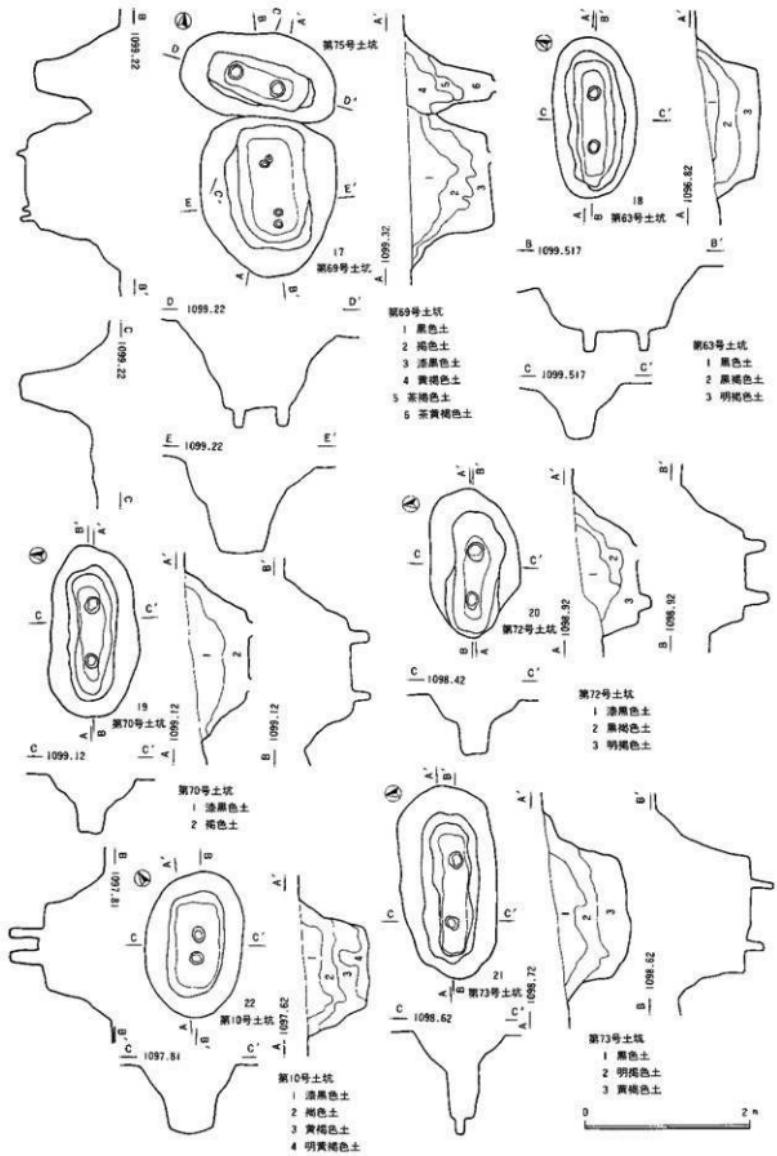


第6図 土坑(1) (1/60)

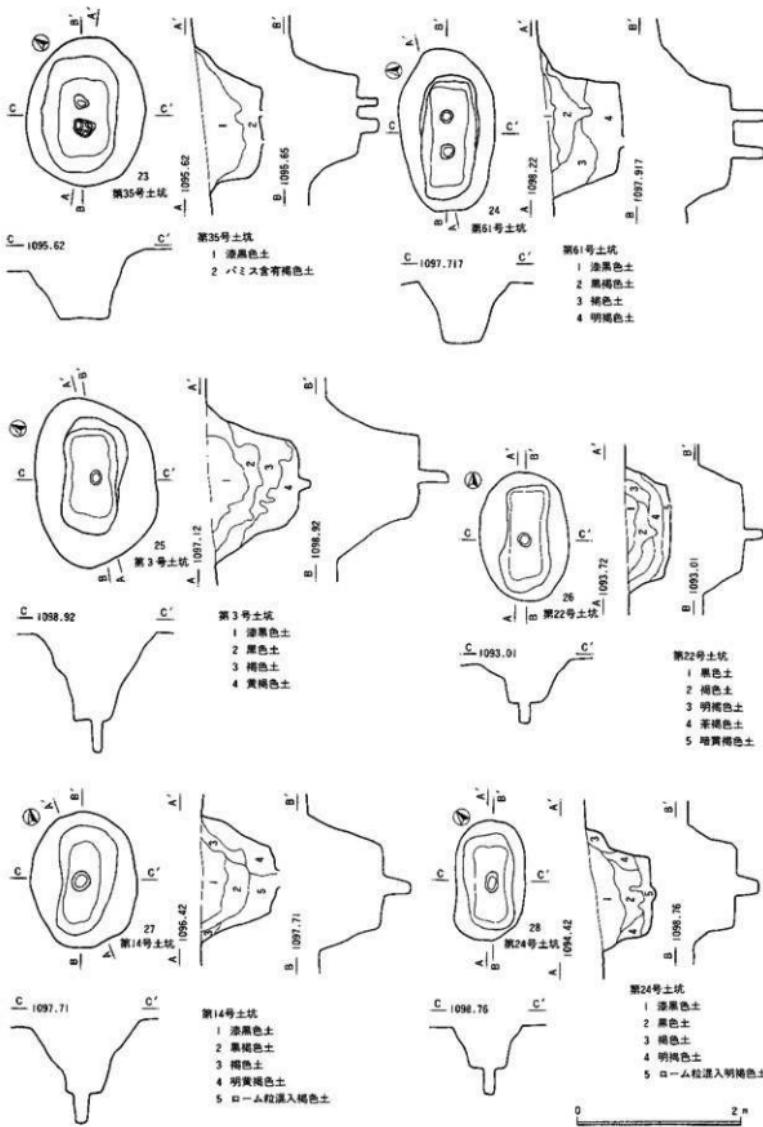




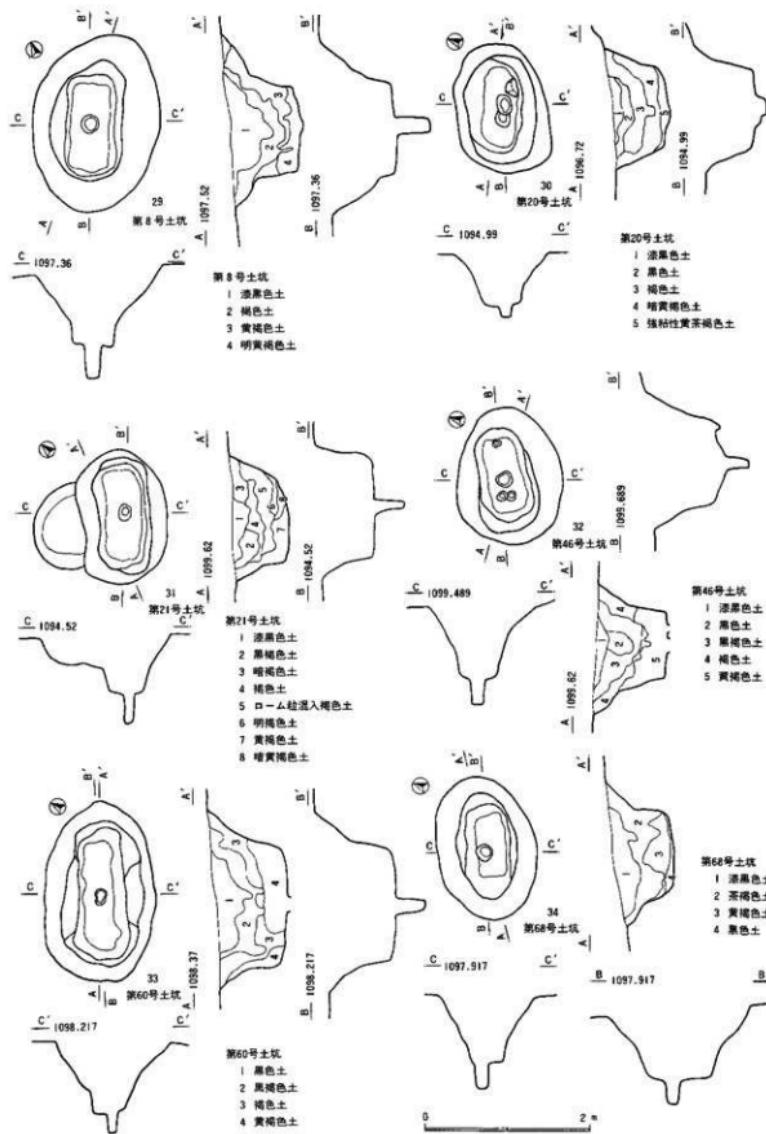
第8図 土坑 (3) (1/60)



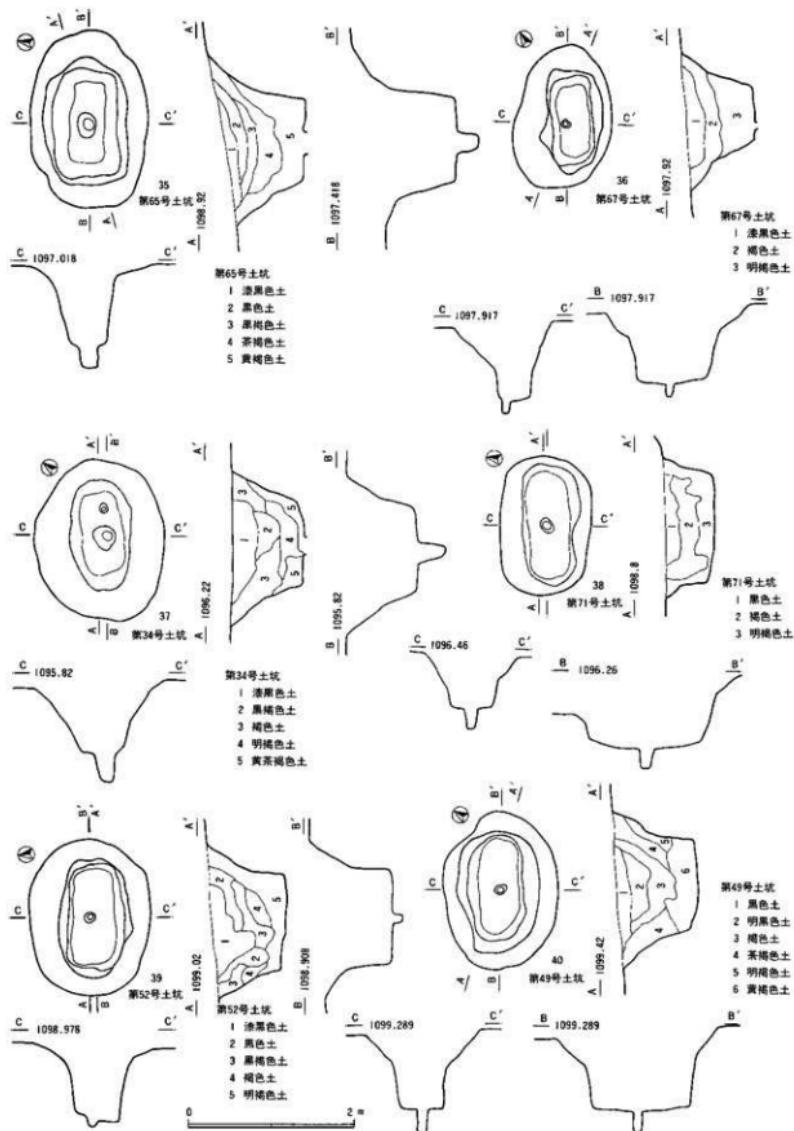
第9図 土坑(4) (1/60)



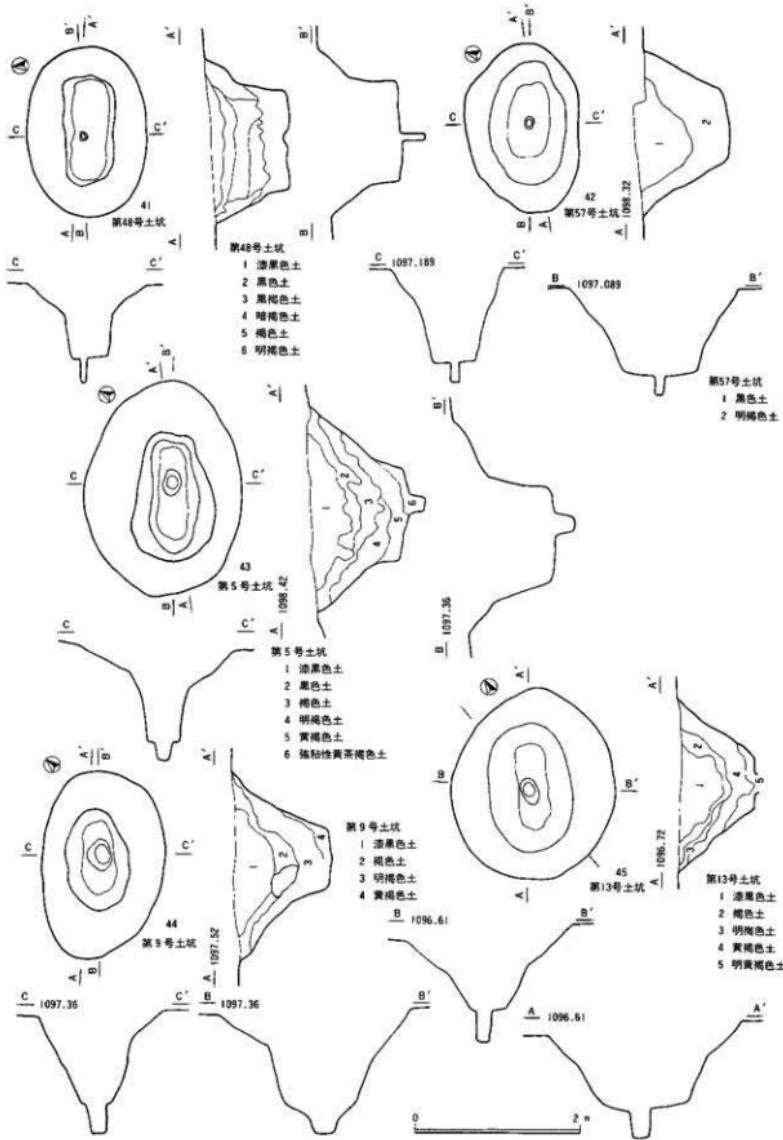
第10図 土坑 (5) (1/60)



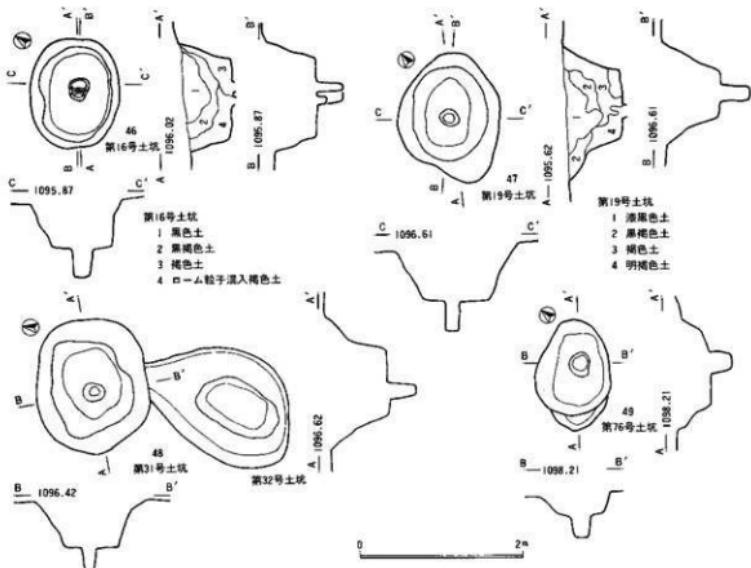
第11图 土坑(6)(1/60)



第12図 土坑(7) (1/60)



第13图 土坑(8)(1/60)



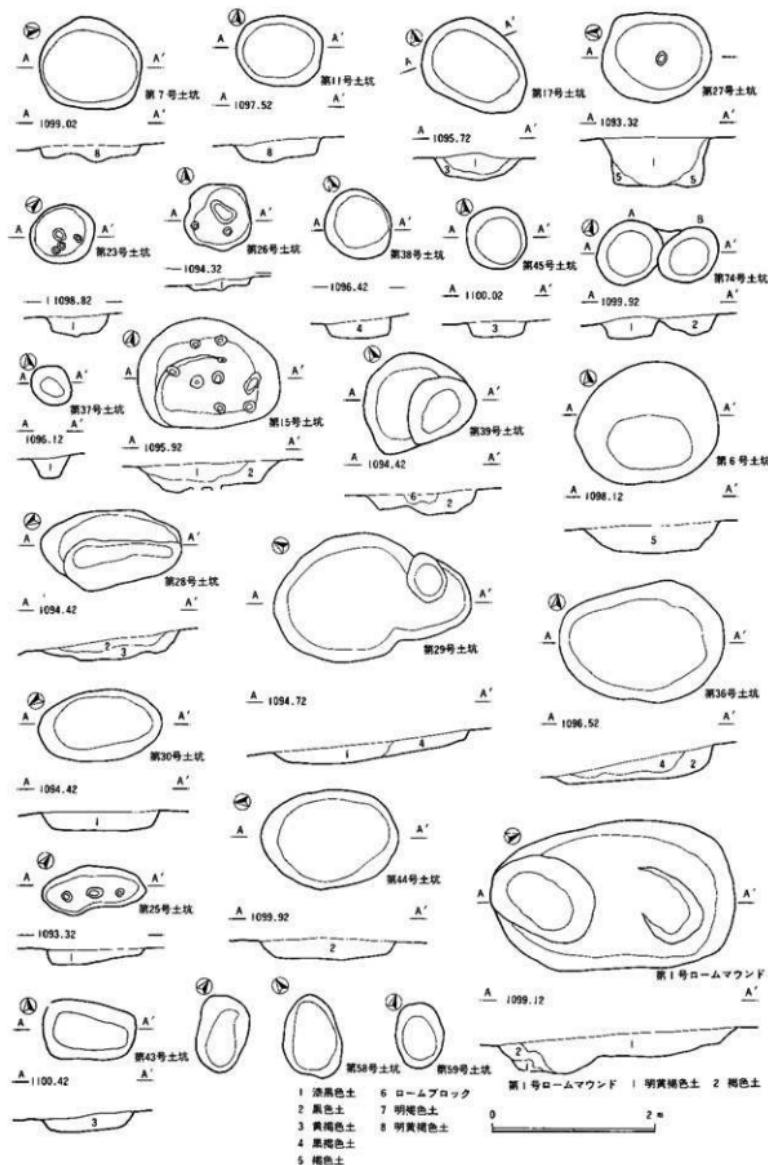
第14図 土坑(9)(1/60)

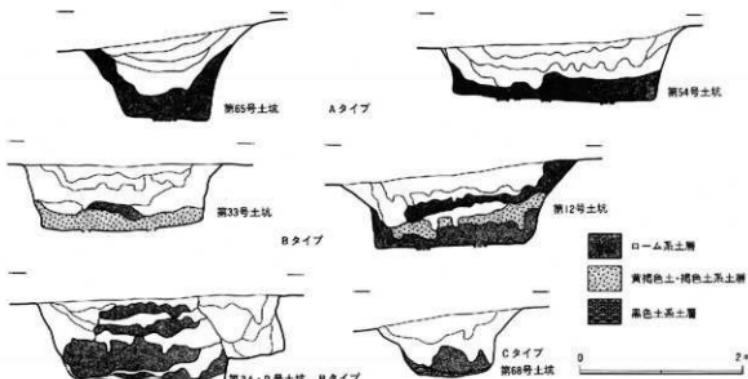
本であったと考えられるが、このような構造に加えて坑底には逆茂木を設けて、より捕獲の威力を高めている。このような構造を基本とするものとして、第Ⅰ群1類があり第Ⅰ群1類C種が典型例である。これに対して第Ⅰ群2類A・B種や第Ⅰ群3類のように坑底が前者に比べて幅広となるものがある。このような構造の差は時間差や目的対象物差を想定することができ、坑底幅の狭いものは概して上面の規格が大型で深いものが主体を占める点や、同様な構造を持っているもので重複関係を有している点などを考慮すると、時間的な差が構造差に反映されたと考えるよりも、目的対象物差が構造差に反映されたものと考えられよう。

第Ⅰ群の構造の特徴の一つに坑底に穿たれた小孔の状態にある。これを基準に種別を行ったが小孔の掘り方や規模、その位置に着目すると、掘り方が丹念で深さもあるものが中心となるが、第Ⅰ群1類A種に見られるような小孔を穿つものも認められる。前者の小孔の状況を観察すると、第35・16号土坑のように孔数=逆茂木数と言えない例があり、第64号土坑の場合直径約40cm、深さ約55cmの掘り方内に直径10cm前後の逆茂木を4本立て周囲を黄褐色土で埋め固めた状況を観察することができた。これらの点より割合規模のある小孔掘り方内には複数の逆茂木を埋め込んだものと捉えても良いと考えられ、これに対して第Ⅰ群1類A種のものはその掘り方が小規模である点や、断面形等を観察すると杭を直接坑底に打ち込んだものと思われる。

第Ⅰ群の分類を小孔の数において行ったが、坑底に検出された小孔の数が同時に土坑の逆茂木として機能していたものとはいい難く、土坑が繰り返して用いられていた結果と捉えることができよう。そのためには小孔の数による土坑の細分にはやや問題がある。

第Ⅱ群の土坑は第Ⅰ群の土坑とは構造に差異が認められる。第Ⅱ群は簡易な構造を呈しているものが主体





第16図 土坑の上層状態 (1/60)

を占めるのに対して、第II群1類B種のように割合しっかりした構造を有するものも見られる。これらの群はフラスコ状土坑に帰属するもので、構造等から貯藏穴の可能性が強い。なお、第2号Bは第I群の土坑との重複関係を有しており、性格が異なる上坑同志が重複関係を有している点に興味深いものがある。

土坑の土層の堆積 検出された土坑の上層特に1群の土坑について、その堆積状態についてローム層の堆積状況に着目すると、大きく3グループに分類することが可能である。

Aタイプ 坑底にロームが堆積し、その上部には黒褐色土や黒色土が割合規則的に水平に堆積するものである。坑底に堆積するローム層は詳細に観察するとロームの状況はブロック状とはならない。色調は地山のローム層に比較して渾りを持ち2次堆積を思わせる。

Bタイプ Aタイプと異なり特徴的な上層堆積を示すタイプで、ブロック状のローム層と黒色土系土層が互層となるものである。第2号A土坑のものが最も典型的であるが、第33号土坑のようにローム層があまり明確でないものも見られる。

Cタイプ 坑底に薄く黒色土の堆積が認められるタイプで、黒色土上面にはローム層が堆積する。第68号土坑に観察されている。

これらの3タイプの土層の堆積状態が如何なる要因により生じたかを考えてみると、Aタイプの状況はローム系土層の状況より類推すると、坑底に堆積するこれらの土層は土坑の壁等が冬期の凍結等の影響による崩落した結果と捉えることができよう。また、この土層上に堆積する黒色土系土層の堆積状況はレンズ状堆積を基本とする点から、自然堆積の状況を示すものと考えることができよう。土坑の土層堆積状況で最も特徴的な傾向を示すものにBタイプがある。ブロック状のローム層の互層の状況から、Aタイプの土層堆積状態が重なった様相を呈しているとも捉えることができる。このような互層を示す土層堆積について人為的埋没⁽²⁾と捉える方向と、互層は季節変化により生じ繰り返して土坑が利用された結果と捉える方向がある。第2号・33号土坑の土層状態から自然埋没の繰り返しと土坑の再利用が窺え、土坑が1回限りの使用で廃棄されたものではなく、壁や土坑から掘り上げた土が自然崩落して徐々に埋没する段階で、土坑が浅くなりながらも再使用が行われていたことが窺えた。

土層堆積の状況をタイプ別に分類したが、再利用の問題も含めて興味深い土層堆積状況を呈するものに第

54号土坑がある。上層の浅い窪みに焼土塊や加熱痕跡のある礫が、廃棄されたような状態で検出されている。これは周辺で行われた焚火の残滓が浅い窪みの中に廃棄されたものと考えられる状況を呈していた。このように埋没過程にある土坑内を焚火の箇所としている例は、中原遺跡第1号七坑の土坑埋没過程において上面で焚火をした例や、稗田頭B遺跡第7号土坑のように土坑埋没過程の上面に焼石炉？が構築された例がある。

土坑の遺物の出土状況と土坑の時期について 土坑の堆土より遺物を出土する例は本遺跡においては、全体の約1%に過ぎず、殆どの土坑が遺物を出土してはいない。遺物が検出された第16号土坑のものを観察すると、土層の堆積状況から自然堆積した際に遺物が流入した状況を示していた。なお、第16号土坑から得られた資料は磨石で、遺跡内になんらかの理由により持ちこまれた石器が廃棄後に遺構内に流入したものと捉えることができよう。

遺跡内や土坑内より時期を決定でき得る出土遺物がないこともあり、遺構の時期を明確に示すことはできなかったが、第50号A・B土坑、第69・75号土坑のように重複関係を有しているものや、様々な形態を呈する土坑が存在し、これらが一定の群別となり列をなす点などを考えると、土坑群はある程度の時間差を有して構築されたものと考えることができ。また、土坑の類型差によって重複関係を有している点を考えると、ある意味において類型差は時間差を現しているものとも考えることができよう。重複関係から土坑の類型による時間差がある点を今回把握することができたが、第50号A・B土坑や第69・75号土坑の重複関係から考えると、第I群1類B種（第50号A）が第I群1類C種（第50号B）を切っていることより第I群1類C種が古いことが窺え、同様なことが第69・75号土坑間にも認められる。以上の要点より第I群1類C種を他の類型の土坑よりも古い段階に属するものとして捉えることができよう。

土坑の分布状態 今回の調査により得られた土坑は78基を数えるが、その量は遺跡と認定でき得る範囲を考慮するとその量は決して多い量とは言い難く、遺構の分布密度は低いと言える。

土坑が調査区約7,000m²の空間より検出されているが、土坑は調査区全体に満遍なく散在するのではなく、類型によりある程度のグループを有して分布していることを捉えることができる。調査区の地形は東西方向に浅い谷が走り、この浅い谷を挟むように南北に尾根状の台地が展開する。土坑特に第I群の土坑はこの谷を囲むように分布する傾向が窺え、全体形の平面觀はやや崩れた馬蹄形状を呈する。全体の状態は馬蹄形状を呈するが、詳細に土坑の類型別に分布状態を概観すると類型差により若干の偏在性を認めることができる。南側尾根にしか第I群2類C種、第I群3類A種が見られず、北側尾根にはこれに対し第I群1類B種が見られるように、土坑の類型差により占地に偏りがあることが指摘できる。

第I群の土坑の配列は類型同志で一定の配列を形作っており、ある程度の計画の基に第I群の七坑は配されたものと考えられ、その配置も類型により異なりが認められた。落し穴が一定の配列の基に配されている点について、狩猟対称となった動物の獣道に関わるものではないかとの考え方もなされているが、土坑の類型によって占地域に差異が認められる点などを加味すると、獣道に加え狩猟方法も土坑の配列に大きく関わっていた可能性も考えられる。

北天原遺跡土坑一覧表

測量番号	標出位置	長軸	短軸	上端標高(m)	下端標高(m)	長軸 距離(m)	短軸 距離(m)	深さ (cm)	底面形状		中段	土壤類型	出土遺物	土層状態	備考	
									底面 傾斜 (度)	底面 深さ (cm)						
第1号土坑	C-19	2.25	1.31	2.25	0.29	N-67°-E	90	7	26.6	23.9	23.9	有	1.断続A種	Aタイプ		
第2号土坑	E-20	2.39	1.33	2.06	0.23	N-52°-W	115.2	4	14.2	10	11.5	7.2	有	1.断続A種	Bタイプ	
第3号土坑	E-20	0.79	0.71	0.63	0.41	N-13°-W	83.3	1	35.6	1	1	1.5	有	1.断続A種	Aタイプ	
第4号土坑	F-17	2.02	1.45	1.01	0.44	N-51°-E	99.5	1	30.4	29	39.8	15.9	有	1.断続A種	Cタイプ	
第5号土坑	F-17	4.43	1.52	2.52	0.48	N-61°-E	86.7	8	30.4	29	39.8	15.9	有	1.断続A種	Aタイプ	
第6号土坑	B-17	2.63	1.50	1.13	0.34	N-63°-E	108	1	34.2	34.2	34.2	1	有	1.断続A種		
第7号土坑	D-17	1.74	1.45	1.02	0.66	N-67°-E	53	6	10.2	10.2	10.2	1	有	1.断続A種		
第8号土坑	F-15	2.25	1.11	1.16	0.88	N-3°-E	19.7	1	39.7	39.7	39.7	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第9号土坑	E-16	2.28	1.51	0.89	0.44	N-41°-E	81	1	39.7	39.7	39.7	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第10号土坑	D-16	2.28	1.18	1.03	0.32	N-32°-E	107	2	39	39	39	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第11号土坑	C-16	1.78	1.38	0.93	0.32	N-32°-E	81	2	32	31	32	1	有	1.断続A種		
第12号土坑	D-15	1.05	0.84	0.85	0.65	N-81°-E	34.3	1	39.7	39.7	39.7	1	有	1.断続A種		
第13号土坑	C-14	2.92	1.56	1.62	0.46	N-69°-E	102.3	2	21.6	21.6	21.6	1	有	1.断続A種	Bタイプ	
第13号土坑	E-14	2.31	1.89	1.03	0.36	N-30°-E	94	1	33	33	33	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第14号土坑	E-13	1.65	1.33	0.98	0.46	N-12°-E	81	1	32	32	32	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第15号土坑	C-12	1.74	1.33	1.19	0.89	N-79°-E	29.9	1	36	36	36	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第16号土坑	D-16	1.32	1.07	0.99	0.72	N-58°-E	50	2	11	22	22	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第17号土坑	C-12	1.38	0.98	1.02	0.66	N-44°-W	32.7	1	36	36	36	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第18号土坑	R-10	2.61	1.56	1.95	0.45	N-44°-E	98.7	8	34.6	34.6	34.6	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第19号土坑	E-10	1.45	1.24	0.81	0.52	N-22°-E	60	1	37	37	37	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第20号土坑	D-9	1.56	1.09	0.97	0.4	N-70°-E	61	1	37	37	37	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第21号土坑	E-8	1.62	1.06	1.11	0.41	N-56°-E	65	1	36	36	36	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第22号土坑	E-22	1.57	1.06	1.06	0.35	N-25°-E	57	1	23	23	23	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第23号土坑	E-20	0.81	0.72	0.64	0.56	N-36°-E	26.1	1	14.2	14.2	14.2	1	有	1.断続A種	Aタイプ	
第24号土坑	D-20	1.45	0.84	0.94	0.34	N-36°-E	78	1	29	29	29	1	有	1.断続B種	Aタイプ	
第25号土坑	H-4	1.25	0.52	1.13	0.33	N-50°-E	28.2	3	12.4	10.3	10.3	6.3	有	1.断続B種		
第26号土坑	H-3	0.86	0.85	0.74	0.57	N-67°-E	18.7	1	36	36	36	1	有	1.断続B種		
第27号土坑	J-5	1.29	1.1	1.06	0.18	N-13°-E	74.3	1	10.6	10.6	10.6	1	有	1.断続B種		
第28号土坑	H-6	1.72	0.93	1.43	0.58	N-27°-E	16.7	1	36	36	36	1	有	1.断続B種		
第29号土坑	H-7	2.4	1.32	2.15	1.22	N-33°-E	26.4	1	36	36	36	1	有	1.断続B種		
第30号土坑	H-8	1.5	0.87	1.2	0.6	N-32°-E	21.8	1	36	36	36	1	有	1.断続B種		
第31号土坑	G-8	1.64	1.36	0.82	0.63	N-37°-E	37	1	34	34	34	1	有	1.断続B種		
第32号土坑	G-8	2.0	1.3	1.8	0.34	N-27°-E	34.7	1	36	36	36	1	有	1.断続B種		
第33号土坑	G-8	2.43	1.3	1.94	0.48	N-74°-E	82.7	3	22.6	22.6	22.6	11.4	有	1.断続B種		
第34号土坑	G-10	2.0	1.6	0.98	0.52	N-32°-E	81	1	33	33	33	11.4	有	1.断続B種	Aタイプ	
第35号土坑	I-11	1.8	1.43	0.94	0.59	N-67°-E	58	2	24.6	24.6	24.6	23	有	1.断続B種	Aタイプ	
第36号土坑	J-12	2.0	1.4	1.64	1.1	N-83°-E	38	1	36	36	36	11.4	有	1.断続B種		
第37号土坑	K-12	0.54	0.46	0.28	0.18	N-34°-W	37.1	1	36	36	36	11.4	有	1.断続B種		
第38号土坑	K-13	0.81	0.81	0.62	0.62	N-35°-W	24	1	36	36	36	11.4	有	1.断続B種		
第39号土坑	L-9	1.38	1.12	1.02	0.8	N-67°-E	29.6	1	36	36	36	11.4	有	1.断續A種		
第40号土坑	G-7	2.39	1.62	1.45	0.53	N-35°-E	81.9	3	9.5	22.2	22.2	12.4	有	1.断續A種	Aタイプ	

梵天原遺跡上坑一號

遺構番号	検査位置	上端標高(m)		下端標高(m)		長軸方向	深さ(cm)	底面形状	中段	土坑解説	出土遺物	土質状態	備考		
		長軸	短軸	長軸	短軸										
第41号土坑	G-7	1.33	1.3	1.15	0.92	N-85°W	16.7	3	39.8	35.8	有	II型2類A型 I型1類B型	Aタイプ		
第42号土坑	J-21	3.01	1.19	2.48	0.56	N-79°E	74.2								
第43号土坑	L-21	1.13	0.69	0.9	0.39	N-76°W	38.8								
第44号土坑	L-20	1.66	1.18	1.35	1.0	N-2.5°E	18.3								
第45号土坑	K-20	0.75	0.57	0.73	0.53	N-19°W	24.7								
第46号土坑	J-19	1.69	1.28	0.9	0.41	N-65°E	90	1	30		有	II型2類B型	Aタイプ		
第47号土坑	J-18	2.06	1.2	1.21	0.49	N-87°W	92	1	29		有	II型2類C型 I型2類B型	Aタイプ		
第48号土坑	K-19	1.92	1.39	1.15	0.49	N-65°W	92	1	26	35.6	有	I型2類B型	Aタイプ		
第49号土坑	M-19	2.68	1.22	1.86	0.4	N-45°H	81.1	2	33.2	35.6	有	I型2類B型	Aタイプ		
第50号土坑	M-19	1.63	1.16	0.87	0.22	N-72°W	106.6	2	26.7	30.6	有	I型2類C型	Aタイプ		
第51号土坑	N-18	2.16	1.41	2.1	0.52	N-69°E	93.9	3	27.6	34	有	I型1類C型	Aタイプ		
第52号土坑	M-18	1.92	1.48	1.16	0.51	N-82°E	94	1	10		有	I型2類B型	Aタイプ		
第53号土坑	O-18	2.18	1.17	1.17	0.21	N-77°E	130	2	13	15	有	I型1類C型	Aタイプ		
第54号土坑	N-16	2.64	1.9	1.89	0.68	N-67°W	95	6	16.4	16.8	14.7	13.9	有	I型2類A型	Aタイプ
第55号土坑	O-17	0.93	0.6	0.7	0.3	N-27°W	51.1								
第56号土坑	P-18	1.68	0.75	1.4	0.3	N-67°E	57.5	2	31.5	33.6	有	I型1類C型 I型2類C型	Aタイプ		
第57号土坑	K-16	2.65	1.38	0.88	0.32	N-79°W	139	1	23		有	I型2類C型	Aタイプ		
第58号土坑	L-15	0.98	0.7	0.84	0.32	N-32°E	11.3								
第59号土坑	L-14	0.8	0.58	0.53	0.39	N-24°W	27.6								
第60号土坑	O-15	2.2	1.25	1.33	0.36	N-67°E	96.7	1	41.2		有	I型2類B型	Aタイプ		
第61号土坑	Q-13	1.97	1.15	1.2	0.4	N-82°E	76	2	40	36	有	I型2類A型 I型2類C型	Aタイプ		
第62号土坑	Q-17	1.73	0.88	1.11	0.27	N-70°E	68	2	25.3	26.1	有	I型2類C型	Aタイプ		
第63号土坑	R-17	1.95	1.01	1.28	0.27	N-70°E	70	2	32.2	30.2	有	I型1類C型	Aタイプ		
第64号土坑	T-16	2.86	1.3	2.14	0.6	N-88°E	85.1	2	57.1	63.6	有	I型1類B型	Aタイプ		
第65号土坑	N-14	2.16	1.43	1.90	0.43	N-85°E	101	1	25		有	I型2類B型	Aタイプ		
第66号土坑	M-13	2.39	1.28	1.55	0.41	N-76°E	100	2	26	22	有	I型1類B型	Aタイプ		
第67号土坑	P-14	1.72	1.18	0.83	0.36	N-37°E	85	1	14		有	I型2類C型	Aタイプ		
第68号土坑	P-14	1.75	1.2	0.75	0.36	N-69°E	81	1	49		有	I型2類B型	Cタイプ		
第69号土坑	E-21	1.93	1.63	1.16	0.51	N-18°W	107.3	4	4.9	4.8	11.7	II型1類A型 II型2類A型	Aタイプ		
第70号土坑	D-21	2.1	1.05	1.13	0.28	N-87°E	54.5	2	26.9	24.3	有	I型1類C型	Aタイプ		
第71号土坑	C-21	1.75	1.11	1.31	0.52	N-82°E	57	1	24		有	I型2類B型	Aタイプ		
第72号土坑	C-21	1.81	1.1	1.02	0.35	N-83°W	76.5	2	27.2	22.9	有	I型1類C型	Aタイプ		
第73号土坑	B-20	2.33	1.16	1.41	0.32	N-80°W	83.7	2	26.2	22.4	有	II型1類A型 II型2類A型	Aタイプ		
第74号土坑	F-22	0.85	0.72	0.57	0.22	N-25°E	23.4								
第75号土坑	F-22	0.8	0.61	0.5	0.42	N-27°W	100	2	25.2	31.3	1	有	I型1類C型 I型3類A型	Aタイプ	
第76号土坑	E-21	1.91	1.09	0.85	0.29	N-82°E	103.7	2	30.7	46	1	23	有		
	1-7	1.16	0.85	0.88	0.35	N-63°E									

第2節 繩文時代・近世の遺物

I. 繩文時代の遺物の概要

今回の調査により得られた遺物は、黒曜石製の石器は有茎尖頭器1点と石鎌1点だけである。他には黒曜石剝片3点、両極打法により生じた断片1点と、安山岩製の磨石1点が検出されているだけであり、調査面積に比較してその量は微量である。磨石を除き全てが遺構外からの出土であり、また、それぞれに時期を示すような特徴も具備していないために発掘時期は不明であるが、一応全体を縄文時代のものとして取り扱っておく。

有茎尖頭器（第17図1） 不純物の少ない割合透明感のある黒曜石を素材としている。先端部と基部を欠損しており、遺存する現在長は3.1cm、幅1.4cm、重量1.3gを測る。先端部・基部を復元してみると、約3.8cmの長さを想定することができる。先端部を中心に丹念な調整剝離がなされ、断面形は凸レンズ状を呈する。基部は凸基となり、逆刺はやや斜状に開く。本資料について有茎尖頭器と分類したが、基本的な形状は具備しているものの大きさや基部の状態から考えると凸基の石鎌の可能性も高いが、身部が石鎌の身部よりもやや長い点などより尖頭器に分類した。本資料のような典型的な有茎尖頭器とはやや形状の異なる資料が、本遺跡の近辺に位置する金堀塙遺跡や与助尾根遺跡から検出されており、縄文草創期に帰属されているが、本資料も同期として取り扱うことができよう。

石鎌（第17図2） 不純物の少ない黒曜石を素材としている。脚部の一部を欠損するが、ほぼ全体形を窺うことはできる。それによると、身部が長く脚部が短い形態を呈する。遺存する現在長2.7cm、幅1.5cm、重量0.8gを測る。調整は割合丹念で側縁部と先端部を中心に調整剝離がなされており、断面は整った凸レンズ状を呈する。

剝片（第17図3・4） 不純物の少ない黒曜石を用いる剝片である。両者共にポジティブな主要剝離面を有している不整形な剝片である。剝片の大きさやその状態等から、両者共に石器製作を目的に製作された剝片とは考えられず、また、剝片石器として用いられたと思われる調整剝離や使用痕を観察することはできなかつたことから、これらの剝片は、素材剝片生産段階において生じた残片として捉えることができよう。3は現在長3.1cm、幅1.6cm、重量1g、4は現在長2.4cm、幅2.3cm、重量3.7gを測る。

碎片（第17図5） 長さ1cm、幅1.3cm、重量0.2gを測る小さなもので、主要剝離面を有する黒曜石碎片である。一部の側縁端部が折れたように欠損する。

両極打法により生じた断片（第17図6） 不純物を含まない半透明の黒曜石を用いている。現在長2cm、幅0.9cm、重量0.5gを測る。本資料は主要剝離面を有する剝片を素材とし、これに両極打法による加撃を加えた際に生じた断片と思われる。上端に両極打法による特徴的な潰れたような階段状剝離が残っているが、下端には明瞭な階段状剝離は認められなかったものの、折れたような痕跡が認められる。両極打法による剝離の痕跡は、断片全向には至ってはおらず自然面を残す。側縁には裁断面が認められ、断面形が三角形を呈するスパール状となる。

磨石（第17図7） 長さ10.1cm、幅9.2cm、重量682.4gの平面観が不整円形を呈する中型の安山岩の自然円礫を素材としている。磨痕は礫全面には認められず、最も平坦な素材礫の片面と側面に認められるだけである。また、磨痕の状態は素材礫の表面が磨り潰れるほどの状況は呈してはいない。そのために明瞭な面を形成するような磨痕を認めるることはできず、断面形は椭円形となる。磨痕が全面に至ってはいない点や、磨痕が極度に発達して面を構成しない点などを加味すると、本資料は使用頻度が低い段階で施設されたもの

とも考えることができよう。

石器組成について 本遺跡で得られた石器を概観してきたが、量的には少ないものの大きく掘ると石錐等に代表される狩猟具と磨石の植物調理具、黒曜石剝片だけであり、生産具としての打製石斧等が欠落する傾向が窺える。落し穴と狩猟具の組み合わせは遺跡内で落し穴鼠が行なっていたことを現しているものであるが、植物調理具や黒曜石剝片の存在は単に本遺跡内の活動が狩猟活動だけに止まらず、多岐に亘っていることを示している。

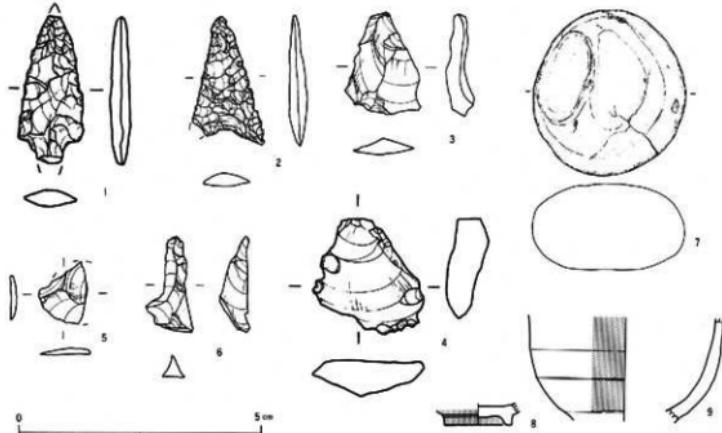
2. 近世遺物の概要

近世に帰属すると思われる陶器片が3点検出されている。これらの資料は本遺跡内の造構に直接関わるものではなく、また、近世にこの地が居住域等として利用されたために遺物が遺存するのではなく、出土状況より全て耕作等により堆肥等に混ざって他から入り込んだ麻芥と考えられるが、この地が耕地として利用されていた時期の幅を示す重要な資料である。検出された陶器片は全て本業焼に属し、時期的には18世紀後半に帰属させることができる。

腰錆湯呑（第17図8） 高台部だけが遺存していたために全体の器形を窺うことはできないが、高台部のあり方や施釉状況より腰錆湯呑とした。高台径は4.2cmを測り断面形は方形を呈する。施釉は高台内外面に鉄釉が施される。施釉状況や器形等より腰錆第4型式かと思われ、特徴等より本業焼第8小期に帰属させることができ、18世紀末葉の年代観を与えることができよう。

丸碗（第17図9） 体部下半が丸味を帯び、上方がほぼ直立する器形を呈する。高台部周辺は露胎となるが、その他には鉄釉が施される。器形が窺えないために詳細に時期を示すわけにはいかないが、特徴等より本業焼き帰属させ18世紀後半の年代観を与えることができよう。

染付丸碗 図示してはいないが染付丸碗の口縁部破片が得られている。内面に呉須による斜交線が口縁部に巡っている。貫入の見られる透明釉が施されている。小片であるために詳細なことは不明であるが、施釉状況等より本業焼に帰属し18世紀後半のものと思われる。



第17図 検出された遺物（1～6は1/1、7～9は1/3）

第V章 調査の成果と課題

第1節 梵天原遺跡の落し穴状土坑について

1. 検出された土坑の概要

土坑の概要 検出された78基の土坑について第IV章第1節1で規模や構造（掘り方等）より大きく第I群と第II群の類型に分類してきた。その際の基準は穴の開け方（構築方法や構造等）を基本とし、土坑・上壙・小堅穴等名称与えられている穴の群と、落し穴の群と性格付けの行われているものに分類できた。

縄文時代の落し穴についての調査例の初見と言われる城の平遺跡の他に、市域においては近年広域に亘る調査により数多くの遺跡から落と穴の報告がなされている。今回調査された梵天原遺跡周辺の樺木地区においても上見遺跡12基、中原遺跡1基、稗田頭B遺跡13基、稗田頭A遺跡7基の落し穴が検出されており、これらの遺跡が立地する地域は、市域においても絶好の狩猟領域であったことが窺える。

落し穴状土坑の分類 今回梵天原遺跡において検出された落し穴はその配列等から、市域においても規模な大きな落し穴群を形成していることを把握することができた。これらの落し穴について上面プランの平面観や坑底の規模、小孔のあり方により7類型の落し穴状土坑を認ることができた。市域において検出されたものについてと、本遺跡で得られたものについて坑底の規模に着目し、比較検討してみると、本遺跡は他の遺跡に比較して多くの類型のものを有していることが窺える。また、規模的に大きなものを含むのも本遺跡の特徴である。このことはどのような要件により生じたか類推してみると、異なる類型の落し穴状土坑が重複関係を有している点より、幅広い時間枠の中で落し穴状土坑が構築されたものと捉えることができよう。

落し穴状土坑の配列 落し穴状土坑の分布傾向については第IV章第1節1において概説したが、全体傾向は大きく台地の輪線に沿って縱走する群（Aグループ）と、台地を切るように横断する群（Bグループ）とを認めることができる。なお、AグループとBグループより構成されるものもある。Aグループの状況の配列は第I群2類C種、第I群3類A種が中心となり、第I群1類B種・C種がBグループの配列となる。第I群2類B種はA・Bグループの組み合わせとなり、浅い谷を囲むという基本的な配置となる。落し穴状土坑内で最も規則的に配置されているものは第I群1類C種が構成するCラインで、これは約5m～8mの間隔で最も長い列で約30mにも及び、長い列が一定の企画の基に構築されたことを窺える。

以上のように各類型の配列状況について記述してきたが、配列の特徴をまとめると次のようになる。

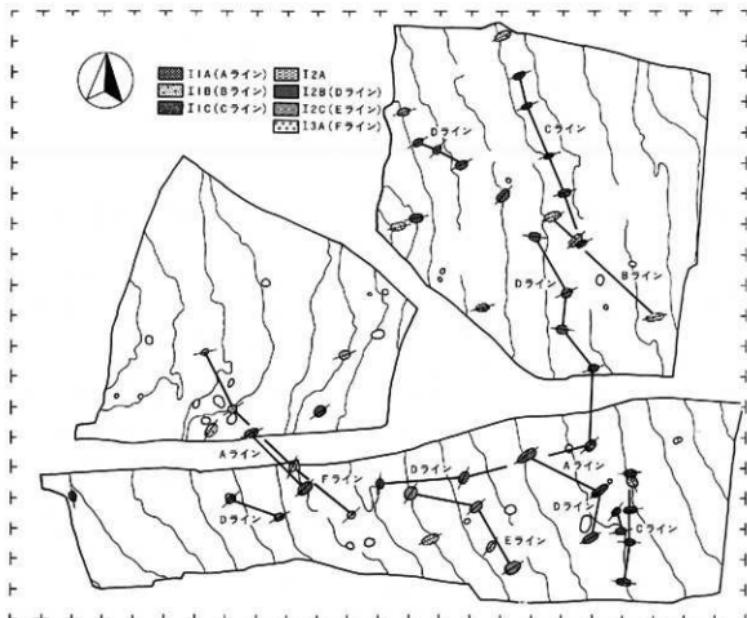
1. 土坑は類型差によりその配列に相違が見られ、類型ごとに組み合さって列をなす傾向がある。
2. 土坑の長軸方向は、台地の等高線に対して直行する形の東西方向に長軸方向をもつものが主体となるが、第22・69号土坑のように長軸方向を南北方向に採るものがある。また、南側Dライン（第8-13-14、20-21号土坑）のように入り組み谷に面しているラインは、長軸方向が東西方向から南北方向へと変化している傾向が窺える。
3. 土坑の配列は台地中央部に入り込む谷を意識し、この谷を囲むように構成される列と、尾根状台地の頂部に尾根の輪線に沿って構成される列、台地を横断するように南北を横断する列の3タイプが認められ、各タイプが組み合さって全体を構成しているものは少なく、類型別による配列の偏在性が認められる。

落し穴状土坑の時期 第IV章第1節1で述べたように、落し穴状土坑の時期を直接示すような手掛かりを求めるることはできなかったが、落し穴状土坑がある程度の時間枠の中で構築されていたことが、重複関係や

類型差の存在から把握することができたが、これらが一体縄文時代でもいつの時期に構築されたものであろうか。本遺跡の情報からでは窺え知れないために他の遺跡の例と比較してみたい。本遺跡の近隣に位置する⁽⁶⁾釋田須B遺跡では、本遺跡分類の第Ⅰ群3類A種に類似する第7号土坑覆土上に、早期末絶条体压痕土器を含む集石が構築されている点や、中期初頭の集落内に構築されている点などより、落し穴状土坑を早期末に帰属させている。上見遺跡では本遺跡分類の第Ⅲ群3類A種に類似する第23・49号土坑や第Ⅰ群2類B種に帰属の第63号土坑からは中期初頭の土器片が出土しており、「遺物の時期はいずれも縄文時代中期初頭である。陥し穴の性格からして他の土坑との同時存在は考えにくく、また遺物の状況から他の土坑と切り合っている陥し穴も、それよりは古そうな状況もあるが、時期差はそれほどなく、土坑が埋没するより前に縄文時代中期初頭の時期を迎えているものと考えられる。」との認識が与えられている。諫市ジャコッパラ遺跡の1区A-4号15c層・1区A-5号21層の陥し穴から検出された炭化した遺物の¹⁴C年代測定によると、前期後半から中期前半の年代である5580±190（4号）、5390±260（5号）の年代測定値が得られている。データーを採取した落し穴状土坑は本遺跡分類の第Ⅰ群1類A種・B種に帰属させることができる。

以上のように周辺の遺跡から得られた落し穴状土坑の年代観を概観してきたが、それによると早期末に帰属されるものと、前期末中期初頭に帰属されるものが認められ、落し穴状土坑が幅広い時間幅の中で造られて使われていたと考えられ、単一の時期の遺構ではないことが窺えた。

落し穴状土坑配列の変遷 落し穴状土坑がある程度の配列とそれらが時間差を有していることを指摘した。



第18図 落し穴状土坑の群別とその配列 (1/800)

そこで落し穴状土坑群がどのように変遷してきたかを復元してみる。遺構の重複関係からCラインを構成する第I群1類C種が古い点を考慮すると、このラインが最も早く構築された可能性が高い。続いて遺構の形態の類似性や配列ラインの重なり等よりA・Bライン、次にDラインへFラインへと変遷するものと考えることができようか。この配列変遷を占地より見ると、西側谷部に面した斜面を中心的に台地を横断するよう展開するものが、徐々に西側谷部を開拓するように移動して来ることを看取ることができる。

2. 梵天原遺跡の性格と周辺遺跡との関係

本遺跡の性格と問題点 本遺跡の性格を落し穴状土坑の存在より狩猟域の遺跡と単純に理解してきたが、落し穴状土坑以外の第II群とまとめた土坑も本遺跡においては検出された。第II群土坑の中にはその覆土の状況より人為的に掘り廻されたものではと思われるようなものも含まれているが、第2号B・27号土坑のような袋状の深い掘り方を持つ土坑も認められ、この地が落し穴=狩猟域としただけの単純な構成を持つ遺跡ではなく、狩猟域としての面と違った側面を有していると考えられる。

第2号土坑では落し穴と第II群上坑が重複関係を有しており、上層観察より落し穴を第II群土坑が切っていることが確認されている。この点を考慮すると、時間的に大きく遺跡の内容が変容していることが窺える。第II群土坑内のある程度の構造を有する第II群1類B種のような類型は、その構造や覆土の状況から考えると貯蔵穴としての性格を考えることができそうである。また、第16号土坑の覆土上から検出された磨石の性格を強調するならば、植物調理が行われていたことが窺われ、これらの資料を貯蔵穴と結び付けることができそうである。

遺構の性格と出土石器の傾向を合わせて考えてみると、本遺跡が落し穴と石錐に代表される狩猟の場的な組合せから、貯蔵穴と磨石に代表される植物にウェイトを置いた生産活動の場へとの変化することを認めることができる。なお、この傾向は第I群と第II群の重複関係から捉えられた遺構の内容変化のあり方からもつかむことができた。同様な傾向を示す例としては本遺跡と同地域に位置する上見遺跡に見ることができる。上見遺跡の場合も落し穴群が数段階に亘って構築された後、一般的な土坑を中心とする生産域へと変容するようである。また、上見遺跡の石器組成も本遺跡と同様な構成を示している。

小地域内における本遺跡のあり方 本遺跡を含む大泉山東側一帯は、一つの地域としてまとまりを有していることを述べたことがある。⁽⁹⁾ この小地域における本遺跡は、狩猟域等の生産活動の場であるが、単独で生産域が独立するものではなく、生産域と居住域が組合わさせて生活圏を形成していたと考えられる。そこで本遺跡に関わる居住城遺跡との関連を考えてみたいが、本遺跡の時間軸が不明確である点や他の遺跡と関連付ける資料が得られていない点などより、具体的に関連性を裏付けることはできない。しかし、小地域における遺跡の存続の仕方や遺跡の内容変化の把握によりある程度の関連性を予測することはできる。

大泉山東側に接する山麓台地一帯は、複雑な入り組み谷を有する地域で小規模な谷を隔てて様々な性格を有する遺跡が群在する。これらの遺跡については平成2年度から継続されている県営圃場整備事業に伴う発掘調査により6か所の遺跡が調査され、生活領域や遺跡相互間の関係が明らかになりつつある。

この地域に最も古い人々の足跡が記されたのは、旧石器時代のもので小規模な生活址が上見遺跡、稗田頭A遺跡、稗田頭B遺跡より検出されている。この後縄文草創期の有茎尖頭器を持つ人々が梵天原遺跡や、金堀場遺跡に出現する。これらの遺跡は主として狩猟を対称にしたものと考えられる。この傾向を継続して早期に落し穴を用いた獵が稗田頭A遺跡、稗田頭B遺跡や中原遺跡で行われ、中期には上見遺跡、梵天原遺跡、稗田頭A遺跡が狩猟域となり、稗田頭B遺跡や中原遺跡は居住域へと変化する。前期末には稗田頭A遺跡が居住域、上見遺跡、梵天原遺跡が狩猟域へと変化し、この動きをまとめると下記表のようになろう。

このように小地域における遺跡は、当初狩猟域として切り開かれた地域が居住域へと変化するものや、狩猟域から生産域へと変化するものが認められ、時間軸の中で遺跡の性格が微妙に変化してきたことが窺える。また、本遺跡周辺に展開する遺跡は単独で立地していたのではなく群を成し、それぞれが遺跡の性格に応じた役割を果たして、集団の領域を形成していたことを把握することができた。この点を加味すると本遺跡は稗田頭A遺跡や稗田頭B遺跡の集落を支えた狩猟・生産域であったものと推察される。落し穴を中心とした狩猟域は、落し穴が規則的に群を形成して構築され、それらがある程度集落域との距離を持ちながら展開することより、狩猟域は単一の集落に帰属するものとは考えられず、小地域の集団獵域であった可能性が強く、小地域集団の結束の基に獵域が形造られていたものと考えることができる。また、獵域の設定は落し穴に重複関係が認められる点などより、狩猟域の設定は単なる空き地を利用し、どこでもよいと云うような選定ではなく、狩猟対象物の動物の習性とうによりこの地域が選定されたものと考えられ、たび重なる利用はこの地が狩猟の渓地として認識されていたからだと考えることができよう。

狩猟城から植物を背景にした生産域への変化は、環境変化が大きな要因かと思われ、落し穴が構築されていた灌木混じりの草地が変化したことや、動物のオーバーキル等に伴って、この地の利用方法も変化したものと捉えることができよう。

今回調査された梵天原遺跡は集団の落し穴が行われた狩獵域であることが確認できたが、狩獵域も周辺の環境変化に応じてその役割を変化させてきたことが窺えた。

第VI章 結語

概木地区における県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査は、平成2年度から開始され、本年度の梵天原遺跡の調査を持って最終となる。6年間に亘って上見遺跡（平成2年度調査）、中原遺跡（平成3年度調査）、稗田頭A遺跡（平成4年度・平成6年度調査）、稗田頭B遺跡（平成5年度調査）、稗田頭C遺跡（平成5年度調査）、梵天原遺跡（平成7年度）の6か所の発掘調査が行われた。その結果以前は不明確であった大泉山東側一帯の縄文時代の様相が明らかになってきた。

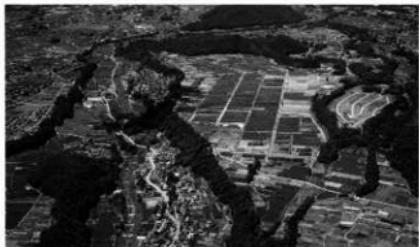
調査の結果、この一帯は独立した尾根ごとに縄文時代中期初頭の集落が展開しており、八ヶ岳西南麓において中期初頭の集落の密集地で一つの遺跡群形成していることが把握された。また、これらが単に密集といった現象面だけではなく、遺跡間で相互関係を持ち、中期初頭の時間枠の中で台地間で小規模な移動が繰り返されていることが指摘されている。

このような成果に加えて今回は、集落をバックアップしていた生産域のあり方について具体的に触れることができた。上見遺跡や稗田頭B遺跡調査時においても落し穴の群在より狩猟域の指摘されているが、今回の調査により梵天原遺跡から得られた落し穴群の在り方は、上見遺跡や稗田頭B遺跡の情報に加えてこの地が大きな集団の狩猟域であることを明確にし、落し穴を用いた狩猟域が集落と組合わさって大きな生活圏を作っていることを想定できた。また、狩猟域が環境変化等により植物生産域へと変化していく状況が上見遺跡や梵天原遺跡の遺構の変遷より窺うことができた。

今後平成2年度から蓄積された概木地区の遺跡の情報を詳細に検討する必要があり、この小地域を一つの群として捉えられるか、相互関係や変遷などはどうになっているのかについて、今まで得られていない成果を加えて再度考えていかなければならぬ。

（註）

- (1)今村 哲爾 1973 「第2部考察編 箱ヶ丘遺跡の上見群に関する考察」『箱ヶ丘』箱ヶ丘遺跡調査団
- (2)竹石 健二 1980 「所轄土壤の機能についての考察」『史叢』第25号 日本国学学会
- (3)小松 貢名 1981 「II 土坑の調査について」『多摩ニュータウン804遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- (4)菊池 実 1987 「縄文時代の落し穴調査法と派生する諸問題」『研究記要』群馬県埋蔵文化財調査委員会
- (5)藤澤 良祐 1987 「付篇 本焼業の研究(I) III. 本焼焼の変遷(I)」『櫛』市民俗資料館研究紀要 湘潭市民俗資料館
- (6)小林 健治 1994 「第V章まとめ」『稗田頭B遺跡』茅野市教育委員会
- (7)小林 淳志 1991 「第V章まとめ 第2節 縄文時代 (I)土坑」「上見遺跡」茅野市教育委員会
- (8)佐本 崇夫 1988 「IV. 遺構と遺物 4.落し穴状遺構の機能した時期と遮蔽物として利用された植物 (2)遺構の機能した時期」『ジャコッパラ』諏訪市教育委員会
- (9)守矢 昌文 1994 「第IV章 調査の成果と課題 第2節 縄文時代中期初頭における稗田頭C遺跡周辺の遺跡の展開について」『稗田頭C遺跡』茅野市教育委員会



(1)遺跡上空遠景（東側から）



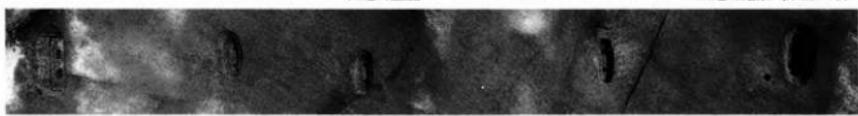
(2)遺跡上空近景（東側から）



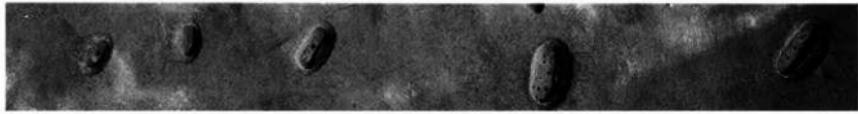
(3)遺跡上空



(4)遺跡近景（東側から）



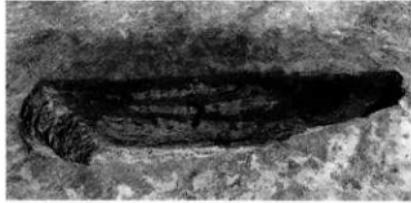
(5)南北方向に並ぶ土坑（第53・56・62・64号土坑）



(6)東西方向に並ぶ土坑（第51・54・60・67・68号土坑）



(7)第2号土坑



(7)第2号土坑の土層堆積状態





(8)第4号土坑（西側より）



(9)第18号土坑（北東側より）



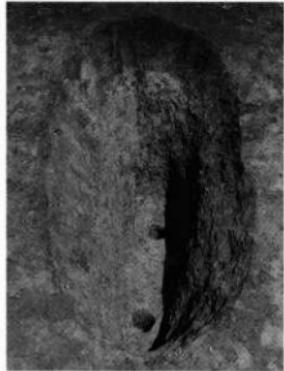
(10)第64号土坑（西側より）



(11)第73号土坑（西側より）



(12)第73号土坑の規模



(13)第53号土坑（東より）



⑯谷に沿って東西方向に並ぶ土坑



⑰土坑の掘り下げ

⑱発掘調査に携わった人々

報告書抄録

ふりがな	ばんてんぱらいせき							
書名	梵天原遺跡							
両書名	平成7年度県営圃場整備事業桜木地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	守矢昌文							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL 0266-72-2101							
発行年月日	西暦1996年 3月22日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
梵天原	長野県茅野市 桜木 梵天原	20214	291	35度 59分 54秒	138度 14分 29秒	19950519～ 19950831	7,661	県営圃場桜 木地区に伴 う時前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
梵天原	生産域	縄文	落し穴状 遺構 51 上坑 27	石器・剝片 磨石	縄文時代の落し穴群を もつ生産域			

梵天原遺跡

—平成7年度県営圃場整備事業梶木地区に伴う

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

平成8年3月18日 印刷

平成8年3月22日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 茅野市教育委員会

長野県茅野市塚原2丁目6番地1号 (0266)72-2101(代)

印刷 有限会社 森仙印刷所

長野県茅野市本町西3-1 (0266)72-2259
